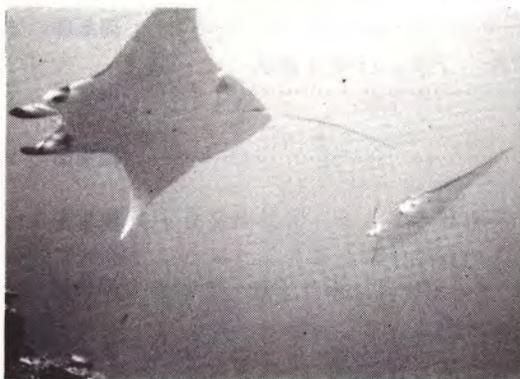


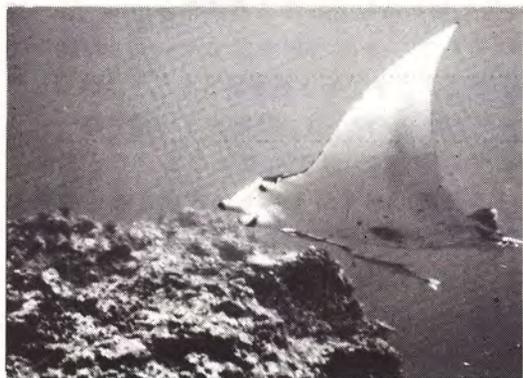
潜水日記より

'91. 3月28日(木) 曇り
潜降場所 沖縄県 西表島 ヨナラ水道
水深 平均13m, 最大15m
透明度 30m以上



海流がかなりあるため、水深15mの岩につかまって待つこと20分、4m級のマンタが2匹近づいて来て、目の前2mのところまで左へターンする。私は、流されないように、膝と肘で必死に岩にしがみついてカメラのシャッターを切っていたのだが、流れに逆らっているというのに、彼らは真っ青な海の中を、舞うように、飛ぶように、泳いでいるのである。※注—マンタ(オニイトマキエイとも言う。)学名 *Manta birostris*

私達がマンタを見るために待っていた、というより、マンタが「泡を吐く、細長い不思議な生き物」を見るために近づいて来たようであった。



全長3~5m、広さで言えば4畳半から6畳間くらいにもなる巨大なエイ。プランクトンなどを食べ、性格はおとなしい。日本のサンゴ礁域、パラオ、フィリピンで見られる。西表島のヨナラ水道は特に有名で、3月から6月にかけて群れて現われることがある。目がくりくりとしてとても愛らしい。

(01 笹土 隆雄)

目 次

本学部は平成17年度末に東広島市へ移転する予定です。これに伴い平成17年度

(専門教育・一般教育)の学期別授業を下記のとおり編成(木曜)とさせていただきます。

エッセイ「潜水日記」より	1
特集：「我々は既成の枠を超えたのか!!」	3
コース編成について	天野学部長 4
コース変遷の歴史	編集部 5
人間文化コース創設に際して	編集部 7
アンケート「総科生に聞きました!!」	編集部 9
教官突撃インタビュー	編集部 11
総 括	編集部 14
新任教官紹介	順不同 16
総科カレンダー	20
研究室紹介	順不同 23
総科サークル大集合っ!!	順不同 34
ソフトボール大会	35
学部の記録	37
飛翔箱	38
編集後記	45

この本は、平成17年度末に東広島市へ移転する予定です。これに伴い平成17年度(専門教育・一般教育)の学期別授業を下記のとおり編成(木曜)とさせていただきます。

〒733-0292 東広島市東区千代田1-1-89
TEL 0854-241-1221 内線2247

THE 特集：我々は既成の枠を超えたのか!?

—コース編成システムの実態に迫る—

真の「総合科学」とは何なんだっ!!

古今東西、老若男女、いつの時代も誰しもが総科生ならぶちあたるであろう壁に、今我々編集部もまともに正面衝突してしまった。うっ……立ちあがれない。どうしよう。…

なんて弱音を吐く事は許されない。常に暗中模索しつつも総合科学部を前進させていく事が飛翔委員としての使命なのだ。はっはっはっ。と笑ってる場合ではない。

「既成の枠を越えた学際的・総合的研究を開拓し、推進する事」、「広領域の専攻による裾野の広い教育を行う事」等をねらいとして昭和49年我々が総合科学部は、既存の大学教育に新風を吹きこむべく創設されたのだ。何とまあ素晴らしい理念が高々と掲げられているのではないか。そして今……。皆一体どう思う？自分は総合科学部のねらいを十分に達成できるよっていえる人は何人位いるんだろう？皆、自分が思い描いていた「総合科学部」と現実とのギャップに惑い、不満をこぼしつつも、目の前のレポートやテストに追われて慌ただしく毎日を過ごしているのが現状なのではないか。しかし、このままでいいのか。

私だって自分自身ははっきりと、「私は総合科学部生です」なんて自信もっていけないしどうしてけばいいのかなんて未知の世界である。でもこの「総合科学部」という、何とも心をくすぐられるような目新らしさに、大きな魅力とはかり知れない可能性を感じている事は確かである。文学部、理学部、法学部……といった既存の学部を選ばずに敢えて総合科学部を選んだ我々である。きっと皆、いろんな希望をもって入学してきたに違いないし、1人1人だっていろんな可能性を持っていると思う。だから……今その可能性の芽を毎日の惰性的な生活によって潰してしまっちゃ駄目だと思う。

「総合科学って何だ？」なんて考えなくっても、わかんなくっても、毎日の生活に支障

をきたす訳でもないし楽しく過ごしていけるよね。実際。でもこの「総合科学部」が内包している偉大な可能性を生かすも殺すも我々次第なのだ。

今回、我々編集部は現状のコース編成システムが総合科学部のねらいを達成しうるべく機能しているかという事にスポットをあてて特集を組もうと奮い立った訳である。

「結局コースに入ったら他学部と変わらないじゃないか」「いやそれどころか専門性はひくいんじゃない?」「もっと外国語コースの定員を増やせないのか」「コース間交流がないよね」等々、いちいち挙げていけばきりがない位問題は山積みされている。さらには、平成4年度からは「人間文化コース」という8コース目も開設されようとしている。うーんまさに波瀾万丈といった所のコース編成システムに注目する事により皆一人一人が、今一度、希望と可能性のたっぷり詰まった総合科学部に対し考え直すきっかけをつかむ事ができれば我々のこの特集への努力は報われたという事になるであろう。えっへん。

(文責 岡村 美穂)

それではまずは天野学部長からこのテーマについてのお言葉を頂いたので読んで欲しい。

コース編成について

総合科学部長 天野 實

広島大学総合科学部は一学部一学科で、学生の教育組織としてコースが作られている。総合科学部設立時には文系2コース、理系2コースの合計4コースだったが先ず外国語コースが作られた。一般教育担当部局の教官とはいえ創立以来10年たってやっと専門の学部生がもてたのは遅すぎた感じであった。

理系は設立当時は基礎科学研究講座と自然環境研究講座所属の教官で環境科学コースの学生の教育にあたり、情報行動基礎研究講座と人間行動研究講座の教官で情報行動科学コースの学生の教育に専念してきた。総合科学部が設立されてから80名近くの教官が赴任してきたが誰もが「学際的」「一般教育と専門教育の一体化」に共鳴賛同しその実現に努力したと思う。しかし約10年間の経験を素直に振り返って見たところ満足すべき点ばかりではなかった。数理情報科学関係の教官は各々のコースに所属していたし、自然環境研究関係の教官は一つのまとまったグループとして学生の指導をしたいと考えていた。保健体育講座の教官も専門の学部生の教育に携わるようなコース改変を考えようとの気運がでてきた。色々な可能性も考えられたが、理系全体で4コース、数理情報、自然環境と他に2コースとのことで現在のような理系4コースが作られたわけである。このあたりの経過は飛翔No.32, 1987 3月20号に詳しく書いてある。

総合科学部の教官の数は一般教育担当であるとはいえ専門学部の学生数を考えると、もっと総合科学部の定員をふやしてほしいとの希望は設立当時からずっとあった。丁度国立大学全体での学生の臨時増募が行われた。このような理系のコース改組も要求事由の一つとして臨増とはいえ学生定員170名の決定をみたわけである。昨年度は環境科学の社会的ニーズを主張し、更に学生定員10名増を獲得した。

他方創設以来15年の経験を振り返り文系のコース改組の問題が提起された。理系改組の

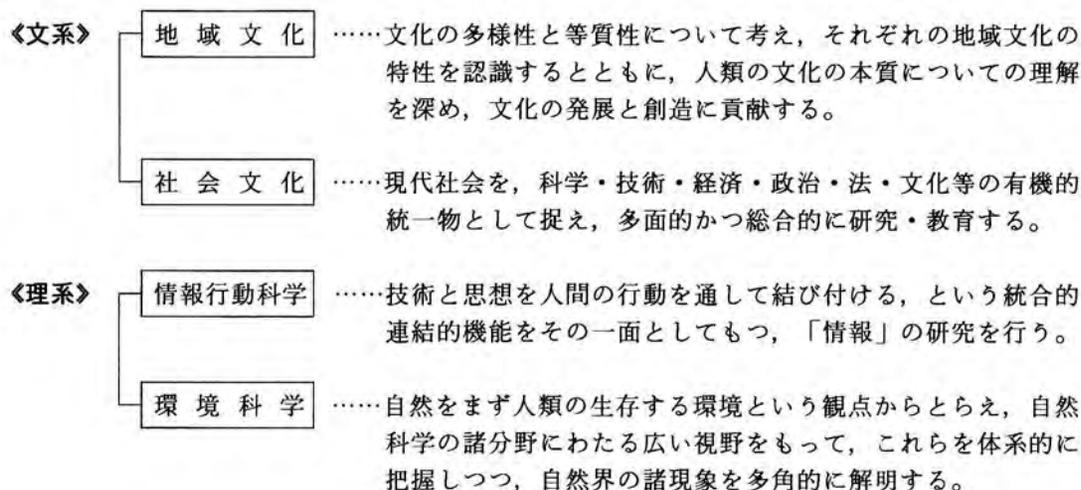
場合にはすべてを壊して新しくコースを作ったが文系の場合には既存の3コースは残しながら新しく一つのコースを作る努力がなされ、「人間文化コース」が新設される訳である。如何なる理念で如何なる構成で講義題目がどんなものかは別の所で詳しく紹介されると思う。

新しいコースは学生の教育の為のグループとしてのコースである。社会のニーズに即した学問領域の余り無理のないグルーピングであれば必ず学生の共感も得られますます発展していくものと確信している。

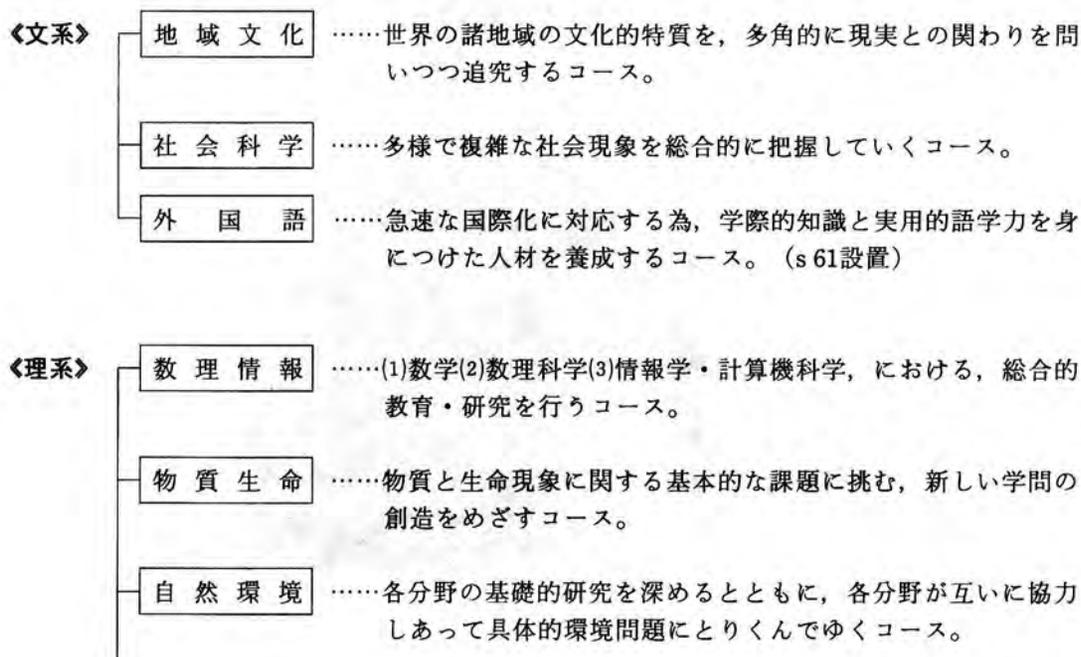
一般的に言って、新しい組織が作られたら当分の間は必ず隆隆発展するものである。どうか楽しい教官グループをつくり、面白い事にどしどしチャレンジしていく活力ある学生の教育をしていただきたい。新しいコースの将来のすばらしい発展を切に期待している。

「コース編成の変遷」

我々が広島大学総合科学部が創設されたのは、昭和49年（1974年）のことである。大学改革の一環として、それまでの教養部を廃して作られた日本で初めてのこの学部は、それまでの学問の枠にとらわれない総合的・学際的な研究を行うという目的をもっていた。この目的のもとで、次の4つのコースが設立されたわけなのだ。



しかし、この4コースで10年以上やっていると、どうもこのコースじゃ時代遅れだって話になったらしい。そこで昭和62年（1987年）、多様化してゆく時代のニーズに対応すべく、以下の7コースに改組されて、現在に至っている。



生体行動 ……生命，人間行動，健康といった幅広い分野を勉強しながらの，新しい人間観の確立をめざすコース。

コース改組で7コースとなって4年経ち，このコース分けも板についてきてかまほこになってきたかなというところであろう。ところがどっこい，またもやコースが増えるという話があるのを，キミは知っていたかい？「飛翔」編集委員の独自の調査によると，平成4年度に，現在の地域文化コース6群が分離して，『人間文化コース』ができて8コースになるらしい。これについて，皆なの間でも賛否両論があると思われるが，コースが細分化してゆくのが本当に良いことなのだろうかと考えるといささか疑問が残る。総合的・学際的な学問としての総合科学という，設立当初の目的を見失っているように思えるからである。この点について，これから様々な人の意見を参考にしつつ，考察を深めていきたいと思う。

次のページから，我々と共にコース編成，総科について，考えてくれたらうれしいな♡

(文責 古川 博子)



「人間文化コース創設に際して」

～今何故、「人間文化コース」なのか～

平成4年度より総合科学部の8番目のコースとして、「人間文化コース」という新コースが誕生する事になった。

総合科学部は、昭和49年に創設されて以来、人間性、創造性、総合性を三つの柱として、狭い専門分野に閉じこもる事なく隣接分野への視野を広げる努力をしてきた。

だが、時代の進展、社会の要求に合わせて大学は常に自己改革、自己評価をはかることを求められていて、そのため昭和62年春にコース改組をして現在の7コース体制になったのである。

総合科学部は250人程の多彩な教官団を擁し、一般教育と専門教育の有機的結合による充実をはかってきた。しかしなお総合的で幅広い学問によって育てられた人材に対する社会的需要に応えるべく、学生定員を従来の170人（内、臨時増募50人）から200人程度になるよう努力してきた。

時代は物質文明の充実から精神文化の解明へと大きく変わろうとしている。高度な科学や技術の発展をもたらした人間存在そのものの解明、並びに人間の作り上げてきた諸文化の探求こそ新時代を切り開く急務であるという考えに基づき、「人間文化コース」は総合科学部の文系、理系の諸コースの協力のもとに創設される事になった。

この新コースは2つの研究群（比較文化研究群と現代文化研究群）より構成されているが、さらに両者にまたがる多数の複合的授業科目（上演芸術論、都市文化論、女性学など）を設け、さらに数多くの他コースの授業科目を選択必修に含み、真に総合的な「人間文化」の探究を行うおうとしている。

（文責 水島 裕雅教官）

○比較文化研究に入って思うこと

「比較に入って何を研究するつもりですか？」4月のコース決定以来、私は何度もこう聞かれてきた。そしてその度に私は何と答えて良いのか困ってしまった。何もやりたいことがないわけではない。逆にやりたいことが多過ぎるのだ。

大学進学を考え始めた頃、私は何となく、文学だとか法律だとか、特定の専門分野にとらわれたいかと思っていた。当時は言語に特に興味を持っていたのだが、それもただ語学を学ぶ、というのではなく、広くその背景にある歴史や文化、民族などといったものも研究したかった。この希望を実現させることができる場所として、私は総合科学部を選び、さらにその中でも比較文化研究を選んだのだ。

さて、希望通りのコースに入ってはみたものの、正直なところ、私はとまどっている。「特定の地域、分野にとらわれない」比較の自由な雰囲気の中、私は何をしたら良いのかわからなくなってしまったのだ。言語学もやりたいが、美術にも興味はある、民話や童話も捨てがたい…と、いろいろ目移りして、一つに絞ることができないのだ。そして、多くのことに関心を持ち始めると同時に、今度は自分の知識がいかに狭く、表面的なものであったかを実感させられてしまう。あれもこれも、もっともっと勉強しなくては…とあせってしまうのだ。

しかし、あせりはしても、自分のやりたいことをやれるというのは、幸せなことだと思う。比較には広くいろいろなことに関心を持ち、そのために自分で努力して学ぶことのできる環境があると思う。まだ2年になったばかりの私が言うのもおかしい気もするが、私は比較に入って本当に良かったと思っている。

（文責 森野 美和）

○自由で豊かな伝統を持つ比較文化研究群

比較文化研究群は、新コースの誕生に際し人間文化コースの一翼として独立した。その前身は地域文化研究コース内の比較文化研究講座であり、1974年の総合科学部の発足以来学問研究・教育に精彩ある充実した活動を示し、卒業生も既に百数十名に上る。

その歴史を通して目に立つ特徴に、自由な雰囲気と絆の強さがある。例えば卒業論文の執筆に際し、学生諸君はテーマの選択及び指導を請う教官を自分できめ、立派に研究を成し遂げていく。最近の卒業論文の傾向の一端は、神話・風景・服飾・漫画・SF・映画・言語論・広告論 etc. に窺えよう。学生諸君と教官の結び付きも強く、卒業後も目に見えない愛着の故か、学生時代の精神的故郷としてか同窓会が連綿と続いている。

比較文化という建物を支える何本かの柱に、哲学・宗教学・倫理学・美学等の人間にとって貴重な価値を問う学問があり、また文化の具体的な現れである音楽・文学・美術・演劇・映画等の芸術を研究する学問がある。これらの学問また領域を、従来の固定観念や制度に囚われずに、自己の主体性を核に、比較しつつ真理を訪ねるのが、比較文化の学風である。その自由さと関心の広さとは、上に示した卒業論文の多彩さが証明していよう。

この比較の大屋根の下、世間とは別の風が吹いている。そこに集う学生諸君の滞り振りは様々であるが、要は本人次第である。殿堂の廂から内を覗くだけのもの、客間で充実の時を過ごすもの、奥の院まで足を踏み入れるもの、建物を出て自ら行脚するもの……。皆他力の風の俣に自力の振舞いの大事さを知り、卒業後は現代の大空へ国の内外を問わず羽ばたいている。その多くは、学際的な視野と洞察力を生かして、現代に必要な知的な仕事に従事している。既成の枠を超えた自由な活動に就くものも多い。

(文責 青木 孝夫教官)

○現代文化研究群では何が学べるか？

現代文化研究群は、外国語コース所属教官のうち、文学や思想や芸術を研究対象としている者を中心として新たに発足する研究群である。かつて見られなかったほど激しく変化する現代の文化を、総合的に捉え学際的に研究する事を目ざしている。

この群で開講予定の授業科目は、文化を中心とするものと文学を中心とするものとに大別できる。

文化関係の授業では、現代文化を、特定の領域に限定せず全般的に扱おうとするのが特徴である。現代の文化現象を社会との関連で論じる授業として「現代社会文化研究」、思想的側面を取り扱う授業として「現代思想文化研究」を予定している。現代文化を知るには、その源流となった文化にも目を向けなければならない。「現代文化背景論」、「近代文化研究」、「近代文化批判論」はそのための授業である。その他、国際文化交流や神秘思想を講ずる授業も開講予定である。

文学関係の授業は、ジャンル中心の授業と地域中心の授業の二つの柱からなる。20世紀に入って技法上の変化を大きくとげ他領域との融合も盛んな「現代小説」、現代人の意識をもっとも尖鋭に表す「現代詩」、今その意義をますます深めつつある「現代批評」、新たな実験的な試みが見られる「現代演劇」、文学とも深く関わる現代の「映像芸術」などを扱うのが、ジャンル中心の授業科目である。地域中心の授業では、ヨーロッパやアメリカの現代文学に加えて、今注目を集めている現代中国やロシア・東欧の文学をも学ぶことができる。

この研究群を真に活かせるかどうか、それは、学生諸君の意欲にかかっている。現代に生きるものとして、若々しい感覚を働かせながら独自の視点を持って、現代文化という豊かな魅力的な領域を開拓してほしい。

(文責 西村 雅樹教官)

総科生に聞きましたっ!!

先日おこなった「コース編成」に関するアンケートの結果をお届けします。

調査対象は、1年生127名、2年生35名、3年生59名、合計221名でしたが、全ての意見をのせることは無理ですので、目立った意見を中心にまとめさせていただきました。御了承ください。

また、今回のアンケートに寄せられた様々な御意見をうかがって分かったことがあります。「既成の枠をこえた学際的、総合的研究を開拓し推進すること」が総合科学部の理念なのですが、その理念を達成するための土台である「コース編成」に関して、まだまだ問題が多いということです。

「コース編成」に関するアンケート

1. あなたは、何故他の学部ではなくて、あえて総合科学部を選んだのですか？

- 専門分野にとらわれず幅広く勉強できる
- 理転・文転が可能
- 偏差値または入試科目が自分に合っていた

2. 実際にこの学部に入學して満足できていますか？

- はい
理由・自由な雰囲気がある（1年）
 - ・自分のやりたいことが分かってきた（2年）
 - ・様々な勉強ができる（3年）
- いいえ
理由・理系コースをを目指す授業選択に制約が多い（1年）
 - ・講義が専門的すぎる（2年）
 - ・専門的な勉強が浅い（3年）

【1年生のみに対する質問】

2年生から実際コースに分かれるわけなのですが、今どんなことをやっていきたいと思っていますか？

- 自分の行きたいコースに沿った勉強
- 様々な分野の勉強
- 単位をおとさないこと

【2, 3年生のみに対する質問】

現在、自分のコースに満足していますか？

- はい
理由・やりたい事ができる（2年）
 - ・教官との交流（3年）
- いいえ
理由・必修科目にしばられている（2年）
 - ・コース分けの後は他学部と似たようなことをやっている（3年）

【現在のコース体制に対する意見】

●各学年の共通意見

- ・1年間の選択猶予期間に意味がない（1年生のうちから専門がやりたいから、2年生でのコース選択のために1年生時の授業選択に制約がでるから）
- ・コース間の提携がほしい
- ・コースが分かれすぎ
- ・コースにとらわれない授業選択がしたい
- ・コースの人数制限はいらぬ

●1年生の意見

- ・入学前に学部説明をもっとくわしくやってほしい
- ・コースをふやしてほしい

● 2年生の意見

- ・ゼミや研究室では学ぶ範囲がせますぎる
- ・一般教育から全コースに行けるようにしてほしい
- ・コース内にさらに細分化がある
- ・講義内容がやすい
- ・他コースの授業はとりたくない
- ・専門性が他学部より低い
- ・興味あることは十分できる

● 3年生の意見

- ・興味のないものまで必修したくない
- ・コース変更をしやすくしてほしい
- ・教官たちも総合科学部の存在意義を考えてほしい
- ・教官自身が学問の枠にはまっている
- ・コース分けは専門知識獲得のため必要

「既成の枠をこえた学際的、総合的研究を開拓し推進する」という、分かったようで分からないことをやるには、やはりコース分けは必要だとする意見はあるのですが、コース決定後そのコースに埋没してしまい、結局は学部の理念からかけはなれた状態になってしまうようです。また、逆に学部の理念など無視して専門の道をきわめようとしても、そのコース内での専門性は他学部にくらべると低くならざるを得ないようです。

このように、現在のコース編成システムは、総合科学部の理念を達成したいと考えている人にとっては束縛が多いものであり、理念などどうでもよい人にとっては専門性の低いものであるようです。

つまり、現在の総合科学部は中途半端なコース編成システムをかかえた学部だと言えそうです。

(文責 中島 英紀)



教官突撃インタビュー

世の中は変わりつつある……しかし従来の学問体系では様々な問題に対処できない。

↓
そこで作られたのが

総合科学部

なのだ。

先に示した学生アンケートからいくつかの問題点を挙げる事が出来るが、それらの問題について、先生方はどう考えておられるだろうか。我々編集委員は、何人かの教官にインタビューを試みることにした。以下はその報告であるが、各先生方にはあくまでも個人的な意見として話していただき、編集委員がまとめたものである。

ここで我々は、先生方の持っておられる総合科学部の理念が、ごく大雑把に2つのタイプに分けられることに注目した。理念が違えば、現状の評価、将来への展望も当然違って来るだろうと思われるので、2タイプを分けて見ていくことにする。

理 念

タイプ1：個人的総合科学部

タイプ2：集团的総合科学部

- 個々人が幅広い視野、視点を持つ。
- 個々人が、自分の専門を核としつつ、全体を統合する。
- 深い人間的教養を持ち (liberal arts) 専門以外のことも話すことのできる人間に。
- 専門と専門の間を埋める。

(コメント)

このタイプは、各個人が、自分の専門分野を軸にその周辺分野をも幅広く学んでいこうとするものなので「個人的総合科学部」と名付けた。しかし各個人が豊かな知識を身に付けることにより、新しい学際的な研究の担い手となり、結果として学問全体に貢献することになると思われる。

- 1つの問題を解決するため、様々な分野の専門家が協力し、研究する。
「一人で総合科学なんて出来る訳はない」

(コメント)

このタイプは、それぞれの分野のスペシャリストが集まって、様々な分野にまたがるような大きなテーマを研究するものである。学際的な研究を集団で行おうとするものなので「集团的総合科学部」とした。ここでは、各個人は自分の専門分野を担うわけだが、他分野の人との共同研究により、幅広い視野を得ることも可能だろう。

総合科学部のメリット

- 多数の教官、科目により、学生の研究したい分野を指導できる体制が整っている。
- 様々な立場 (視野) がある事を知りながら、自分の専門分野を学んでいける環境が用意されている。

1年間の猶予は必要か

必ずしも必要とはいわないが—

- 選べる良さ。
- 高校生の段階で本当にやりたい事を見付けてそこに進むことに困難。
- 幅広い教養を身に付け、柔軟な対応力を。
→しかし現在うまく機能しているとはいええず、改善の必要あり。

- 色々な研究領域に目を向けるチャンス。基礎がしっかりしていなければ、何事にも対応できない。

コース定員は必要か

- 教官の限界を越えない範囲では引き受けるべき。
- 流行等により特定のコースに集中するのは好ましくない。
 - ・外国語コースの教官は一般教育の負担が大きい。
 - ・理系コースのように文系も定員を揃えようとする案もあるが、減らされるコースに不満も。

- 教育という点で望ましくない偏り为了避免するために必要。定員は十分に幅を持たせたものになっている。

成績での振り分けについて

- 問題はあつし、検討も必要。だが普通に勉強していれば、ほぼ希望コースに入れるはず。

- 仕方ない。そのコースの求める能力に達していないのだから。最低限の努力は必要。

コース間交流は

- 定期的に、教授会の後、各分野の教官が自分の専門について講演している。
- 個人的に知り合いはいても、組織的な交流はない。専門性を生かした上で協力し合うという点は稀薄。
- コース内での交流はあるが、他コースとは問題の接点がない限り交流なし。
- 自分の興味・関心に基いたことが出来れば総合科学部の理念に反しない。
- 他コースからの必修や選択の幅がもっとあつてもよい。

- 各分野のプロフェッショナルが集まって共同研究を行うというのが究極の理想なのだが、実際はなかなか難しい。
- 理系内での結び付きは強いのではないか。

コース分けは必要か

- 必要。関連分野を体系的に学べるよう、サンプルを示す責任がある。
- ある程度のまとまりはあつてもよい。
- 便宜的には必要だが、あまり細かすぎるのはよくない。

- 方法論（問題解決の方略）を身に付けていなければ何もやっていけない。
「知的消費者から知的生産者へ」

現状について

- 理想には程遠い。もっと要望を受け入れ、改革すべき。
- 個人の問題意識がコースがあることで抑えられている。
- 従来型に比べれば「枠」を越えているが、やはり小さな「たこ壺」の集まり。
- 教育上有効かつ合理的なコース編成になっているかどうか問題。
- 現在のスタッフを最大限に生かすことができる編成になっている。
- 現在のコース分けの基準は、はっきりしていない。時代に応じたテーマを学生が自主的に選択するのであれば。
- 専門分野の必修が少ない。選択必修制のため、学生が意図的に必修を避ける。

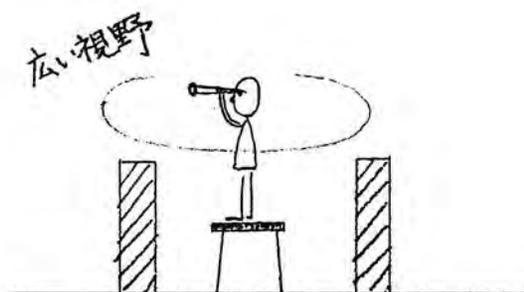
課題・提案

- 企業等の進める実学に対し、大学でこそ行うことの出来る虚学に打ち込む余裕がほしい。
- 常に見直し、変化させていくべきだ。
- 専門、教養共に4年間を通じて学ぶべき。
- 他コースの授業を必修に。
- コースを越えた研究の出来易い体制作り。
- コースをはずして1年次から研究室に入り、1年毎に変更を認めては。
(自分が何を知りたいのか、それには何が必要なかが具体的にわかるので)
- コース分けをもっと大きく、あるいはもっと小さく。
 - ・大きくとは、大きな問題設定のもとで幅広く学ぶ(4コースの頃のように)
 - ・小さくとは、研究室単位にする。

以上インタビューの結果をまとめてみた。幅広い視野を持った個々人の養成、あるいは多くの視点からのアプローチを必要とするような課題の解決に貢献できる専門家の養成と、重点をおくところに違いがある。しかし2タイプ共に重要とする点は、1人1人が自分の核となるような専門の知識をしっかりと身につけることの必要性である。関連性のないバラバラの知識を集めるのではなく、まず自分の問題を見定めた上で広がりを持たせることである。

尚、上の2タイプに含めなかったものとして、学部そのものを文系と理系に分けてはどうかという意見もあった。例えば「総合人文科学」と「総合自然科学」といったものである。

(文責 古田 智子)



個人的総合科学部



集团的総合科学部

総合科学に明日はあるか？

～総合科学とコース編成～

総合科学とは一体何か。今回、コース編成と総合科学という事で特集を組んできた。総合科学部は社会から何を求められており、我々はそれにどう答えたらよいのか。この学部創設以来の永遠のテーマで実践教育を行うため、現在7つのコースが存在し、平成4年度より8コース制になろうとしている。理想と実践教育における二つのメインテーマに触れつつ以下の話を進めていきたい。

まず総合科学部学生便覧の「はじめに」を見ていただきたい。そこには先代達の夢見た総合科学部の理想像が描かれている。「既成の枠をこえた学際的・総合的研究…」 「人文、社会、自然の諸科学を融合し…」 「広領域の専攻による裾野の広い…」 の各節が読みとれるであろう。これらこそが総合科学の理想であり精神である。総合科学部の総合科学部たる所以である。総合科学を敢えて Integrated Arts and Sciences と英訳したのもこのためであろう。細分化された既成の学問を融合していく事、これが総合科学の使命である。

では、実践として現在施行されているコースシステムにおいて、理想が達成されているのだろうか。確かに各コースともコース内においては一応既成の枠を超えた学際的総合的研究を行っており、コース単体としては有機的に機能しているといえよう。しかし、コース間における横のつながりは皆無であり、各コースとも閉鎖的な孤立系としての存在でしかない。教官同志の個人的交流はあっても、コースを超えた共同研究は決して生まれない。このような現状に、理想に掲げた総合科学は存在しない。あるのは総合自然科学、総合人文（社会）科学の名の付く、あくまで現実重視の総合科学にすぎない。いや、理系コース間、文系コース間にすら殆んど接点の存在しない現状において、我々は本当に総合科学を実践

しているといえるのだろうか。

これが今の総合科学部の実態なのだ。あれだけ高尚な理想がありながら、何故理想と実践が結びつかず、結果として総合科学が自然、あるいは人文（社会）という学問領域内の更にせまい領域でしか行われぬのだろうか。

最大の問題は、総合科学という学問体系が確立しておらず、その革新性故にか学問の定義と実践という二つの側面において固定的概念を持たない点であろう。まず学問の定義において、自然、人文、社会の調和という文理融合型総合科学の概念と、総合人文、総合自然という文理分割型総合科学の概念の二つが存在する。次に学問の実践において、個人が一つの事象について様々な学問領域から多角的に眺める個人的総合科学と、様々な学問領域における専門家が寄り集まって一つの事象を研究していく集团的総合科学という二つの概念がある。このそれぞれの側面における二つの概念の対立は未来永劫のものであり、その是非を我々が決定するのは不可能であろう。個々人はどちらの概念であっても構わないのだから。いわば真の総合科学という境地に達する事は、虚空に浮かぶ雲を掴む行為にも似ている。学生を指導する教官方がどのようにこの対立から総合科学の礎を作りだしたのか、我々は知る由もない。しかし現在、前述した文理融合型、個人的総合科学が「はじめに」に掲げられた理想に、文理分割型、集团的総合科学が現実のコース編成にそれぞれ採用されている事に我々は注目せねばなるまい。又、大学という専門性を追求する場所で、はたして総合性というものが成立するのだろうか。

このような矛盾を内包したまま総合科学部は誕生し現在に至っている。既存の学問体系に対する挑戦を前提におきながら、この矛盾が一向に解消されず今日も存在し続けて

いる事が、理想と現実を大きく遊離させている根源である。次に何故この課題が見過ごされてきたのかを、教官、学生の両面において考えていきたい。

まず教官側について、最大の原因は総合科学を教授すべき教官の大部分が総合科学的教育を受けていない事である。つまり既存の学部において育った教官達が自らの専門に閉じ込めりがちであり、更に強い保守性故に総合科学に対する意識、他の学問領域に対する興味関心が希薄になりがちなためである。コース間での共同研究が具体的に動かないのもこの理由による所が大きい。その意味では、現状のコース編成は総合科学的思考のできぬ教官にとって、真に好都合なシステムであろう。その問題点を意識する事なく、自己中心的に自分の探求心だけを満たす事ができるのだから。

学生側の要因として、教官が与えたものをあまりにも従順に、かつ怠惰に受け入れてきた受動的姿勢が挙げられる。総合科学部に対する意識の低さは勿論の事、思考すら怠ってきた事はおいに反省しなければならない。

更に両者に言える事だが、これまでにあまりにも現実を重視し過ぎ、安易な妥協を繰り返してきた。総合科学部は妥協の産物であるなどと言う気は毛頭ない。しかし、創造性の欠如した状態に気付かぬ人間が沢山いた事は決して否定できまい。

結論を急ごう。現状の閉鎖的コースの細分化が今後もなお続くのならば、総合科学に明日はない。理想と懸け離れた似非総合科学の台頭が、やがては学部の存在意義すらも押し潰すであろう。ではどうすればよいか。まず、教官、学生一人一人が総合科学について再考し、お互いを啓発すると共に自ら何ができるか、何を目指すかを考えねばなるまい。そして、積極的に自らが目指す総合科学を追求していかねばなるまい。また、現状のコース制度を更に柔軟なものに改善していく必要がある。自らの専門を決定するのは我々である。決してコースという組織によって、我々の選

択権が、理想が奪われるような事があってはならない。

最後に、現実を重視する事は確かに重要である。その故には妥協も必要な事である。しかし妥協とは、理想を追求し続ける努力をした者にもみ許される言葉である。怠惰な妥協を重ね、安易な現実重視を繰り返していく事から、一体何が生まれるというのか。我々は総合科学という幻想を憶する事なく追い続けなければならない。先駆者の自覚と誇りを持って……。

(文責 大村 尚)

私達はこの特集を通じて様々な事を改めて考え直し、その中で素直に感じるままを書いたのがこのような文章となりました。これについては賛否両論様々だと思ひ、私達だって全て正しい事を書いているとは思いません。学生の立場から教室における内部事情なんて目に見える部分しかわからないのだから。学生にしても教官にしても確固たる目標を持ってがんばっている人は多勢いるでしょう。しかし皆の気持ちにそのような文章を限られた人数の編集部員が書ける訳はありません。私情、私見が入っても当然の事だと思ひます。だからそうじゃないぞなどと反論を多くお持ちなら、是非飛翔委員会に顔を出して下さい。さんざん語り合ひましょう。その上で書きたい事を書いて下さい。そういうものがこの「飛翔」なのだから。

(編集部)

新任教官紹介

自然環境研究コース 助手 中 坪 孝 之



この4月に着任致しました中坪孝之です。東京都渋谷区の生まれで、小学校入学時に東京の郊外の調布市という所に引っ越してから、この春まで同じ所に住んでいました。

3歳ごろから、「生き物」に異常に関心があり、小学校時代は「ファール昆虫記」の影響で、いろいろな昆虫をつかまえてきては飼っていました。中学時代は標本を集めることに熱中し、放課後や休日の昆虫採集が一番の楽しみでした。生物学を勉強しようと考えようになったのは、高校生の時、コンラートローレンツの「ソロモンの指環」や「攻撃」を読んだのがきっかけだったように思います。

早稲田大学に進学し、生物学のさまざまな分野に興味を持ちましたが、野外の生物に対する関心が強かったため、生態学を専攻することにしました。最初の研究は、南極で採集されたコケ群落に着生したシアノバクテリア（ラン藻）の窒素固定に関するものでした。フィールドは写真でしか見ることができませんでしたが、それまで知らなかった下等植物・微生物の面白さ、生態系における重要性を知るきっかけとなりました。以来、極地・高山・火山噴火跡地などの厳しい環境条件下で、下等植物・微生物がどのように生活しているのかということの研究テーマとしてきました。

昨年11月から今年の3月の初旬まで、南極のキングジョージ島の中国基地へ行き、花の咲く植物がほとんどない、コケ類・地衣類・藻類の世界を目の当たりにして感銘を受けました。生態系における微生物や下等植物の役割に関してはまだ十分に研究されていないことが多く、常識が通じないことがしばしばです。自分のような変わり者には向いているかもしれないなどと思いつつ研究を続けています。興味のある方はぜひ声をかけて下さい。どうぞよろしくお願い致します。

地域文化コース 助教授 岡 本 勝

私は4月1日に地域文化コースのアメリカ研究に助教授として赴任してまいりました。神戸に生まれ、東京で育ち、京都とアメリカのボストンで学生時代を過ごし、そして10年間の教員生活を徳島で送ったあと、不惑となる今年広島へやってまいりました。専門は社会史を中心とした「アメリカ研究」で、現在禁酒運動の歴史に焦点を当てて研究活動しております。何故このテーマを選んだのかという質問をよくされるのですが、そういう時はいつも「酒が大好きな自分にとって、アメリカ人が法律に訴えてまで飲酒を規制しようとした点が非常に興味深いので……」と答えることにしています。夜遅く、資料を読んでいるアイデアがまとまらないときは、必ず酒瓶を隣に置いていろいろと考えるのですが、どういうわけか頭の中で問題が整理されてくるから不思議です。そういう時は、飲酒は自分にとって純粋な研究活動の一環であると位置づけて、つつい深酒になってしまいます。

さて、私は大学の2年生まで硬式野球部に籍を置きプレーをしていました。最近では、2人の小学生の息子達とキャッチ・ボールをする程度ですが、その分プロ野球を見ること、つまり阪神タイガーズを応援することが趣味になっています。実は、広島へ来るときに「阪神ファンでも広島で生きていけるのだろうか」と悩みました。思えば、学生時代に広島球場まで阪神の応援に来て、つい調子に乗り過ぎてしまいタイガーズの球団旗を1塁側まで振りに行ったところ、広島ファンに殴られそうな世にも恐ろしい体験をしたことが、その悩みの底にあったのでしょうか。私の授業に出ている学生さんは既に御存知のように、私は阪神のことを話してからでないとしても調子がでてこないのです。クラスでは必ず阪神を話題にしなくてはならない、といつ

も考えています。今のところ教壇に石が飛んでこないのは、多分阪神が弱すぎて指定席の6位(6月10日現在)に落ちているからだと思い、タイガースに感謝している次第です。1日でも早く、身の危険を感じてみたいと思う今日このごろです。

「広島風お好み焼き」のファンになりつつ、アメリカ研究の分野で教育・研究活動に全力投球で取り組む決意でありますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

自然環境研究コース 助教授

本田 計一



私は今から40余年前、大阪で生まれました。小学校に入学して間もない頃から、父の転勤に伴って何度も居所を変り、小学校を3校、中学校を2校経験しました。その間、大阪と名古屋を往復し、その後は私自身の進学、就職で、京都に6年、小田原に18年住み、この4月に広島にやって参りました。このようなこれ迄の流浪の生活によって培われた習性のせい、同じ所で長年暮すことはいささか苦痛にも感じられ、新しい土地に対してはいつも強い憧憬を抱いていました。過去から引き摺ってきた諸々の腐れ縁を一举に精算できるという秘かな目論見も、この新天地を指向する背景に有ることは否めないようです(専門用語を用いて端的に換言すれば、“フリテンをツモリナオスのは趣味に合わない”のです。)

そしてこの広島という土地にも、夢見る少年の如く(今は青春の真直中で身をやつしています)何かを求めてやって来ました。何が得られるかはこれからの私自身の生き方如何として、まず最初の印象は、“馴染み易い街”であり、歳とともに進行する不感症も手伝ってか、余り違和感はありません。ただ、全国で屈指の道路事情の劣悪さと、果物の流通の悪さは、既に私生活にいささかの暗い影を落しています。ともあれ、これから何が起るか、何ができるか、ワクワクのスタートです。

さて、私の研究テーマを少し紹介させていただきます。私は物心がついた頃から生き物が好きだったようで、特に昆虫には先天的にアフィニティが強く、幼少の頃から虫という虫を片っ端から捕まえていました。大学では有機化学を専攻しましたが、大多数の少年昆虫学者が、受験、就職、結婚という関門を前にして、晴々しく虫に見切りをつけてゆく雄姿を横目で見ながらも、小さな生き物への愛着は断ち切れず、いつしか化学と昆虫学とが結びついて、今は特に蝶類の化学生態学に身を浸しています。本格的に研究を始めてまだ10数年ですが、その間、防御物質やフェロモン関連物質等の研究を行いました。現在は植物と昆虫の相互作用の解明に最も力を注いでおり、産卵刺激物質や摂食阻害物質の研究を通して、進化や共進化の問題にも迫ろうと企んでいます。生来のイージーネーターのなせる業か、これ以外にも色々な事に手を染めていて共同研究者を募集しています。化学が分らない人も虫が嫌いな人も心配無用。充分な配慮をしていますので、自然を科学する心を持った熱意の有る人なら誰でも大歓迎、是非一緒に研究しましょう。S 435室を一度訪ねてみて下さい。カッコイイ院生のI君と可愛い4年生のHさんも優しい笑顔で迎えてくれることでしょう。

地域文化コース 講師
長田 浩 彰

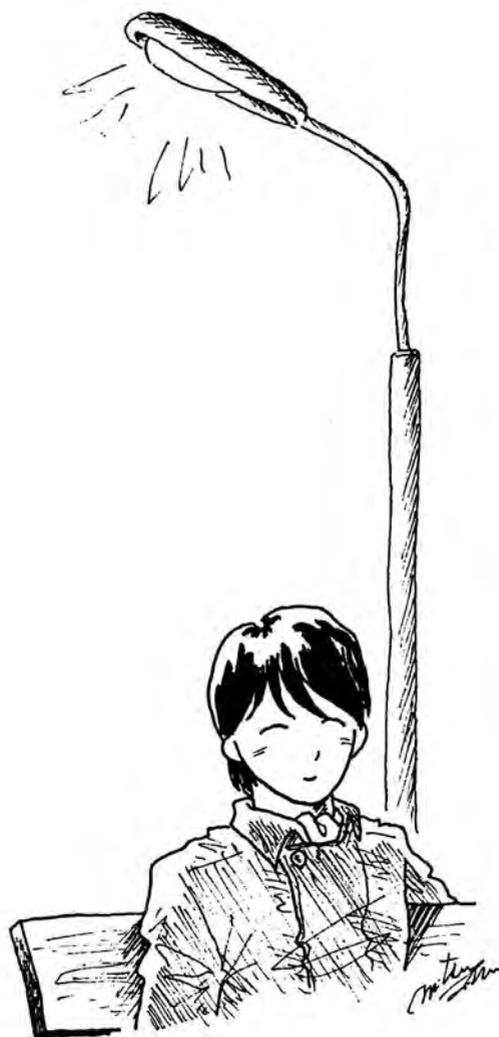
昭和54年4月に広島大学に入学して以来ですから、私の広島暮らしもうかれこれ13年目に入りました。今回、「新任」教官の自己紹介ということで原稿を依頼されましたが、さて何を書こうかとしばらく悩みました。教官としては、駆け出しですが、広大は私にとってまさに「古巣」であります。

ただ、文学部・西洋史という小講座のなかに、学部・大学院・助手時代を通しておりましたので、総合科学部・総合科学科という大講座にやって来て、まだ少々戸惑いごみです。最初から何を勉強するかはほぼ決められている文学部とは違い、こちらは、豊富なカリキュラムから自分の興味関心にそってコースを決め、単位をそろえていくということで、学生の主体性が大きく問われることでしょう。

主体性ということで、私事ながら、留学生としてドイツで過ごした頃のことを思いつまままあげてみたいと思います。

初めての留学の際私は、広大と学生交流の提携のあるチュービンゲン大学・歴史学部に行きました。ドイツの大学には、入学式も卒業式もありません。アビトゥーア（大学入学資格）を取得して学びたい大学に入学出願手続きをし、許可を得れば夏学期（4月～7月）からでも冬学期（10月～2月）からでも学業を始められ、各学期ごとに再登録すれば原則的には何年でも大学にいられます。途中から別の大学に変わることも稀ではありませんし、公立なので授業料もありません。ここで「卒業」とは、医・法・教育学部の学生などは、国家試験に合格することであり、工・経済学部では、ディプロームという資格を取ることであり、文学部で教職をめざさない学生は、マスターやドクターの学位を取ることです。学生は、2つの主専攻（ないし、1主専攻と2副専攻）を選び、ゼミナールを通じて単位を揃えていきます。学業年限がないから、自分で律していかなければ「卒業」までなかなか行きません。もちろん私は短期の留学でし

たからドイツで「卒業」することはなかったわけですが、同じゼミで学んだ学生たちが当初わりと大人に見えたことを覚えています。もちろんドイツの学生もよくパーティーなどをやったり、よく遊びますからご心配なく。総科の学生さんたちも、よく学びよく遊ぶのでしょうから、その中で、自分が何を求めるかといった主体性のある、ないし、それをさがし求める人たちとおおく巡り合っていきたい、というのが今の私の願いです。



数理情報科学コース 助教授
宮尾 淳一



広大工学部を卒業し、大学院工学研究科博士課程前後期を修了し、工学部を経て、この度総合科学部に赴任してきた生粋の広大人です。そのため、行き止まりと段差だらけの建物構造や半地下教室も懐かしく、奇異な感じはしません（というのは嘘でやはり変です）。

私の研究テーマはコンピュータのソフトウェアに関連するユーザインタフェース、リアルタイムソフトウェアなどの開発技法とそれらに用いる効率の良いアルゴリズムの開発です。特に、プログラム記述や動作に視覚化を導入してプログラム開発の生産性と信頼性を向上させることや、組合せ最適化問題における多項式時間アルゴリズムの開発に興味をもちています。

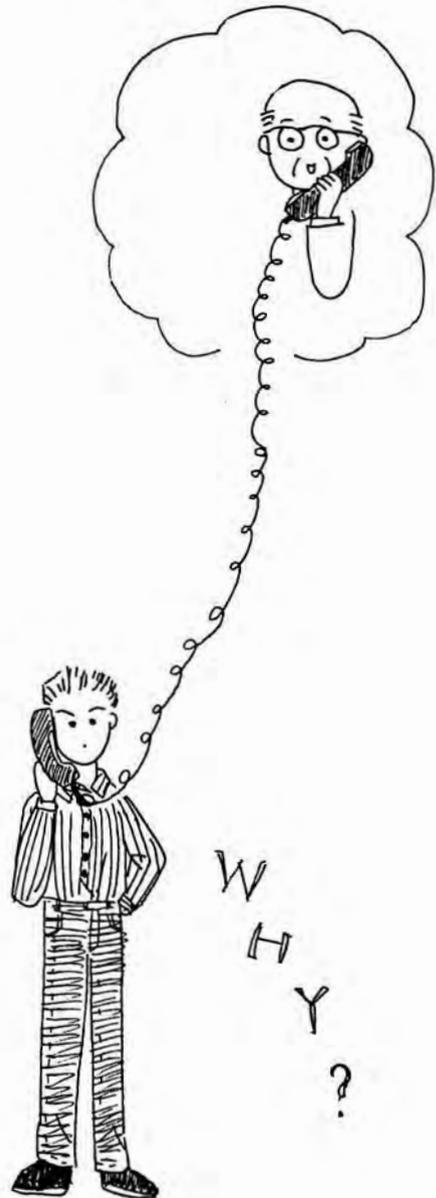
さて、この1カ月あまり、学生の皆さんへ講義をした感想ですが、できるだけ楽をして単位をもらおうという基本的な学生気質は昔から変わりませんが、興味のあることはとことんやるという学生が少なくなったように思います。皆さんから見ると面白くない講義もあると思いますが（私の講義はさぞ退屈でしょう）、皆さんが教えてもらおうという考えを逆にし自分で学ぼうとするとずいぶん印象が異なるはずで。要するに、座して待つな、自分で学べ、極端に言うと教官の知識を盗めということです（決してコンピュータに不正ログインして盗まないで下さい）。

辛口の話はこれくらいにして、もしコンピュータに関してわからないことがあれば、私の研究室に遊びに来て下さい。以下のように対応します（case文で書き換えよという普通の演習問題ですから、本気にしないように。また、標準文法では直接書き換えられないとか、字下げ（indentation）が狂っているとか、言わないように）。

```
if 暇がある then 付き合います
    else if お菓子を持ってきている
        then 喜んで付き合います
    else if オーディオに造詣が深い
```

```
then 別の話をしましょう
else if お酒を持ってきている
then 数時間付き合います
（酒は弱い）
```

```
else 追い返します；
```



総科カレンダー

1年生が4月に入学してきてはや6ヶ月。そうもう半年もたっしまい、すっかり大学生活にも慣れた事でしょう。その半年の間に様々な行事がありました。そこで今回は、入学式、新歓コンパ、オリキャン、ソフトボール大会の4つにスポットをあてて1年生の感想を聞いてみる事にしました。

入 学 式

中 島 英 紀

私は入学式であやまちをおかしてしまいました。面倒くさがりな性格の私は「たかが大学の入学式」と横着にも考え、普段着で出席してしまったのです。

平成3年4月8日、広島サンプラザで広島大学入学式がおこなわれました。会場へと向かう新入生と保護者の流れの中で、自分の格好を悔みつつも、入学式の規模の大きさに感心していました。そして、サークル勧誘の花道では不幸中の幸いか、普段着のおかげで新入生と思われず、たくさんのピラを押しつけられるということはありませんでした。

実際の式のほうは、型通りに始まり型通りに終わり、感銘をうけるようなことはあまりなかったように思います。ただ、一つ驚いたのは大学歌が存在しているということでした。古い大学には歌があるのは知っていましたがまさか広島大学に歌があるとは思ってもみませんでした。やはり、歌は集団の象徴として必要とされるものだ改めて感じました。

式後のサークル紹介では、そのサークルの種類豊富さに驚きました。私の高校では文化系クラブよりも体育系クラブのほうが数が多かったということもあり、特に文化系サークルの多さに「さすが大学だ」と思わず納得してしまいました。しかし、あれだけの数のサークル紹介をいっぺんにやっしまおうというのは、少し無理があったような気がします。あまりに底なしに続くので、新入生は紹介の途中でだんだんと席を立っしまい、最後のほうの紹介のときにはまばらにしか残っていませんでした。私はいちおう最後までずるずると残って見ていたのですが、ようやく終わったときには「疲れた」の一言でした。

こうして、有意義な入学式を体験できた私は、ある想いを胸に家路についたのでした。

「卒業式にはスーツを着るぞ」

一番強く感じたのは、「新入生を楽しませよう」という02の方々の意気込みです。本当に元気で輝いていました。特に最後の「安芸の国」の合唱の時には、「これから何か始まるな」と感じられました。

ついこの間まではあちこちの県に散らばっていた全くの他人どおしで、共通点といえば同じ年に広大総科に入ったことぐらいであるのに、そのたったひとつの共通点のおかげで今こうして何の抵抗もなく話しかけることができるというのは、なんだかおかしなものだなあなどと思っていました。

というわけで、私は参加してよかったと思っているのですが、気にかかったことも1つあります。それは、ホテルに会場を借りた立食パーティーという「場」と、コンパの内容とが、なんとなくちぐはぐな気がしたという点です。私自身、パーティーのマナーについて知識があるわけではありませんが、立食パーティーというのは、お皿を持って自由にテーブルをまわり、いろいろな人と和やかにおしゃべりを楽しむ、というのが本来のあり方だろうと思います。もちろん形式にとられる必要があるわけではありません。でも、「世界にはばたく総科生」としては、せっかくのこのような機会に、世界に通用するマナーを身につけていきたいものだと思うのです。食べはじめたかと思うと一気にたいらげてしまったり、一気に飲みをしたり等々、楽しくて親しみがもてていいのですが、それはまたそうした楽しみ方をする「場」であればいいのです。

「場」に応じて、スマートに振るまったり、ワイワイさわいだり、のんびりくつろいだりと色々に変身できるようになりたいと思います。これは私自身がこうありたいという理想です。

とはいうものの、実際のところとても楽しく過ごさせてもらいました。少し高揚した気分でした。どうもありがとうございました。

私は風邪をひいた。はっきり言って、あんな時期に野外キャンプなんて無謀である。思いっきり遊んでやろうと思っていたゴールデンウィークの前半は、高熱にうなされて身動きがとれなかった。ようやく起きられるようになった後も足がふらついて、かなり怖かった。初めからゴールデンウィークに帰省するつもりはなかったけど、隣りもその隣りも、そのまた隣りも、下宿の人たちがみんな帰省しちゃって、独りで寝込んでるのって、ちょっと言葉じゃ言い表せない程、つらい。どれもこれもみんなオリキャンのせいだ、とは思ってもなかなか憎めないのが、このオリキャンかもしれない。

旅にしろ、何かのイベントにしろ、準備期間が一番楽しいって言うけど、私は何かある度にそう思う。今回も、オリキャンよりその準備の方に醍醐味があったように思う。大学は人生の夏休みだとか、大学生は遊びすぎだのと聞かされていた。それがどの程度のものなのかってというのは、今だに謎なんだけど、その一部を垣間見せてくれたのもオリキャンだった。顔合わせ当日の鍋会に始まり、カラオケ・ボーリングと遊びまくり、その間を縫うようにして、夕食・朝食のメニューを決め、衣装を作り、買い出しに行き、しかも授業に出る。大学生ってものすごく Powerful。あれがたった一週間の出来事なんて信じられない。それに、あの売れっ子アイドル並みのスケジュールをこの私でさえこなすことができたなんて、思い返すと妙に感動する。「成せば成る」という私の好きな名言を地で行ったような一週間だった。しかし、何にも増してうれしいのは、友達が増えたこと。オリキャンがなかったら、恐らく知り合えなかっただろう人たちと仲良くなれたっていうことは本当にうれしいし、これからもずっと友達でいられたらいいと心から、思います。

ソフトボール大会

野見山 次郎

鉛色の空、地面は未だ少し湿っている。つい数時間前まで雨が降っていたのは確かである。朝9時、電話の音に目覚めた私は、その時の時間と集合時間8時との差1時間を考えながら受話器をとった。昨日、夜遅くまで騒いだ仲間からのモーニングコールであった。それから遅れること30分にして学校に着いた時、幸いにも私のチューターの試合は始まっていなかった。

私たちのチームの戦い振りを紹介したいところだが、かくいう私自身よく覚えていない。ただ、敗者復活戦を含め2試合とも02、03の先輩方と戦い、力の差は確実であることと、先輩、教官方の偉大さを悟ったのであった。そして、チームの面々の中には、どこのチームにも負けない人間が数人いた。しかし、彼らは他のチームにいわゆる「助っ人」として出向し活躍したのだが、自分達のチームでは……という皮肉な結果に終わってしまったのである。

勝ち敗けを気にしない私たちのチューターはそれから昼食に入った。同チューターの女子が作ってくれた弁当である。実家を離れて以来、まともな飯をあまり食べていない私は涙を流さないまでも感謝して食べたのであった。

同じチューターの中での知らない人と食事をしながら話をしたり、親睦会で先輩方と話をしたりと総科ソフトボール大会は、単にソフトボールだけでなく、人間的なつながりをより強くするもののように思われた。この日は、私たち03にとって、総科のある一面を知る良い機会であった。



研究室紹介

今回は、いつものように特定の研究室を紹介するのではなく、全コース全教官の研究室で今、何が行われているのかを皆に知ってもらう為にこのような形式で行いました。但し昨年の沼田研修の資料を参考としましたので多少の変更があると思いますがその点は御了承下さい。又、教官の方々、御意見・御不満がございましたらどうぞ飛翔委員の方までお申し出下さい。

学生の皆さん、当然ですがこの表に記載している事が教官方の研究内容全てではありません。自分のやりたい事が何なのか、そしてその為にはどのコースで、どの教官に教わればいいのか、それを確かにするには自分の足で教官に話を聞きに行く事です。この表はその手掛りにすぎませんので……あしからず。

(地域文化コース)

講座等	教官名	研究題目
日本研究	教授 朝倉 尚	禅林における文学の研究
〃	教授 永尾 章 曹	日本語表現論
〃	教授 村上 誠	経済立地と経済地域に関する研究
〃	教授 頼 祺 一	日本近世思想の研究
〃	助教授 桜 原 修	日本近代文学の研究
〃	助教授 佐 竹 昭	日本古代における中国文化の受容の史的研究
〃	講師 中 山 富 廣	日本近世史の研究
〃	講師 柳 澤 浩 哉	日本語教育, 修辞学
〃	助手 澤 宗 則	都市近郊野村の地域社会変容
アジア研究	教授 小 林 文 男	近代日中関係の研究, 現代中国論, 平和学
〃	教授 藤 井 守	中国文化論, 中国古典文学研究
〃	助教授 楠 瀬 正 明	中国の立憲運動とナショナリズム
〃	助教授 嶋 陸 奥彦	文化人類学・東アジアの伝統的社会組織
〃	助教授 高 谷 紀 夫	文化人類学・東南アジア大陸部の宗教と社会
〃	講師 山 尾 政 博	東南アジアの経済開発
〃	講師 吉 村 慎太郎	イラン民族運動と国際関係

講座等	教官名	研究題目
アジア研究	助手 マハラジャン, ケシャブ・ラル	南アジアの農業開発
ヨーロッパ研究	教授 戸田吉信	フロベールを中心としたフランス近代文学
〃	教授 福嶋正純	ドイツ近代文学, ドイツ大衆文化
〃	助教授 木幡藤子	古代イスラエル宗教思想
〃	助教授 レヴィ アルヴァレス, クロード	戦後の日・仏の組織と経営についての比較研究
〃	講師 長田浩彰	ドイツ第二帝制期以降のユダヤ人問題
〃	助手 渡部望	フランス近代文学
英米研究	教授 佐藤信行	インカ帝国とその子孫等現在の生活実態を明らかにする
〃	教授 志邨晃佑	19・20世紀アメリカ合衆国の政治史・社会史
〃	教授 友田卓爾	イギリス近代史, とくにピューリタン革命史の研究
〃	教授 米田巖	イギリス文明圏の比較地域学的研究
〃	助教授 鹿野忠生	アメリカ経済史, とくに貿易・関税問題の歴史学的研究
〃	助教授 岡本勝	アメリカ合衆国の社会改革運動
〃	講師 田原光広	イギリス近代文学
〃	助手 大山茂之	イギリス・ロマン主義時代の文学批評

(社会科学コース)

講座等	教官名	研究題目
社会文化研究	教授 伊藤護也	法社会学
〃	教授 甲斐祥郎	労働関係法
〃	教授 芝田進午	現代社会学, 社会科学方法論, 核時代・反核文化論
〃	教授 高崎禎夫	経済統計論
〃	教授 田村和之	行政関係法
〃	教授 富井利安	損害救済法・環境法論
〃	教授 中峯照悦	労働の機械化の歴史
〃	教授 日南田静真	比較社会経済史, とくにロシア
〃	教授 舟橋喜恵	18世紀スコットランド啓蒙

講座等	教 官 名	研 究 題 目
社会文化研究	教 授 舟 場 正 富	現在地域開発論
〃	助教授 秋 葉 節 夫	階級・階層理論
〃	助教授 鯨 坂 学	地域住民組織・現代都市
〃	助教授 岩 田 賢 司	ソ連の内政力学と外交との関係について
〃	助教授 奥 村 和 久	国際産業論, E C 経済論
〃	助教授 中 達 啓 示	戦後東アジアの国際関係, アメリカ外交史
〃	助教授 西 澤 信 善	発展途上国の経済開発
〃	助教授 松 岡 俊 二	多国籍企業論, 環境経済論
〃	助教授 水 島 朝 穂	平和憲法, ドイツ及び日本の軍事法制の研究
〃	助教授 森 利 一	南アジアの国際関係
〃	助教授 安 野 正 明	ヨーロッパ現代史
〃	講 師 市 川 浩	戦後日本の技術政策, ソ連技術史, 技術論
〃	講 師 材 木 和 雄	産業民主主義・組織論・労働態度研究
〃	助 手 片 岡 直 樹	水法論, 公害・環境法論, 中国法論
〃	助 手 長 沼 信 之	社会調査, 労働者調査

(人間文化コース) 平成4年度開設予定。尚、構成員は検討中。

講座等	教 官 名	研 究 題 目
比較文化研究	教 授 金 田 晋	芸術の比較研究の方法と實際を具体的作品に即して研究
〃	教 授 水 島 裕 雅	日本文学とフランスを中心とする西洋文学の相互交流
〃	助教授 青 木 孝 夫	美の本質と芸術の意義を具体的にまた美学的に探究する
〃	助教授 国府寺 司	西洋近代・現代の美術史および建築史
〃	助教授 古 東 哲 明	現代哲学の諸問題と宗教思想研究
〃	助教授 高 橋 憲 雄	古代ギリシャ思想, 現代倫理学
〃	助教授 原 正 幸	人間と音楽の本質についての哲学的探究
現代文化研究	教 授 稲 田 勝 彦	アメリカの詩と批評
〃	教 授 小 島 基	現代国際文化交流論, 比較文学研究, (東洋と西洋)

講座等	教 官 名	研 究 題 目
現代文化研究	教 授 武 田 智 孝	カフカ研究, キェルケゴールやニーチェとのかかわりで
〃	教 授 檜 山 久 雄	魯迅と漱石一日中近代化の比較
〃	教 授 山 本 雅	アメリカの19・20世紀小説研究, 特に文学と社会の関係
〃	助教授 石 川 達 夫	ロシア・東欧の文学と思想, 文化記号論と文芸理論
〃	助教授 齋 藤 忠 資	神秘思想の研究
〃	助教授 佐 藤 正 樹	ドイツ演劇史, 風俗犯罪とドイツ文学
〃	助教授 中 村 裕 英	現代批評とシェイクスピア
〃	助教授 西 村 雅 樹	近・現代のオーストリアとドイツの文化
〃	助教授 三 木 直 大	20世紀中国の詩と小説
〃	助教授 村 瀬 延 哉	フランス演劇, 17世紀フランスの社会文化と文学
〃	講 師 白 井 雅 美	英語圏の女性作家とフェミニズム

(外国語コース)

講座等	教 官 名	研 究 題 目
英 語	教 授 伊 藤 詔 子	アメリカ文化・アメリカ文学
〃	教 授 岩 倉 國 浩	英語統語論・現代言語理論
〃	教 授 沢 田 和 夫	T. S. エリオットの宗教思想
〃	教 授 高 橋 規 矩	シェリーの詩と批評について
〃	教 授 田 村 一 郎	シェイクスピアの劇とソネット
〃	教 授 藤 本 黎 時	アングロ・アイリッシュ文学研究
〃	助教授 安仁屋 宗 正	カテゴリーカル統語理論
〃	助教授 安 部 剛	異文化間コミュニケーション
〃	助教授 飯 田 操	シェイクスピアの劇
〃	助教授 伊 藤 保	ヴァージニア・ウルフについて
〃	助教授 井 上 和 子	文の意味表示について
〃	助教授 今 里 智 晃	英語辞書の発達
〃	助教授 上 原 麻 子	異文化間コミュニケーション

講座等	教官名	研究題目
英語	助教授 要田圭治	英国小説研究と英国文化史
〃	助教授 小林ひろ江	日英文章構造の違いについて
〃	助教授 ゴールズベリ, ピーター・A.	アリストテレスの弁証法について
〃	助教授 佐野真樹	日英語の対照研究, 理論言語学
〃	助教授 鈴木誠一	古代ゲルマン頭韻詩韻律構造の史的発展について
〃	助教授 西田正	外国語としての英語の読みに関する心理言語研究
〃	助教授 樋口昌幸	中世英語・英文学
〃	助教授 山田純	読語過程(日本語・英語)
〃	助教授 リナート, キャロル	外国語としての英語を教えるための応用言語学
〃	講師 谷本秀康	日米語同時通訳技法
ドイツ語	教授 岡崎忠弘	「ニーベルンゲンの歌」の研究
〃	教授 小野光代	ドイツ語の歴史, ドイツ標準語の成立
〃	教授 嶋屋節子	ドイツ・ロマン派の文学および芸術理論
〃	教授 田中真造	宗教改革史
〃	教授 福居和彦	ドイツの民間信仰
〃	助教授 春日野省三	教養小説, 伝記文学
〃	助教授 北里和則	ドイツ中世文学
〃	助教授 コジマ・ルー, クリスティル・ハンネローレ	ドイツ・ロマン派の作家
〃	助教授 竹島俊之	ギリシャ語・ドイツ語対照研究
〃	助教授 田中暁	トーマス・マン研究
〃	助教授 丹治信義	20世紀のドイツ・スイス文学
〃	助教授 本田和親	現代ドイツ文学
フランス語	教授 熊澤一衛	フローベルとヴォルテールの研究
〃	教授 内藤陽哉	ブルースト研究, 翻訳論
〃	講師 井口容子	フランス語学
〃(スペイン語)	助教授 杉浦勉	スペインおよびラテンアメリカの文化

講座等	教 官 名	研 究 題 目
中国語	助教授 小川泰生	中国語と日本語の対照研究
〃	助教授 郭春貴	現代中国語の文法
ロシア語	教授 米重文樹	ロシア語学

(数理情報科学コース)

講座等	教 官 名	研 究 題 目
情報行動基礎研究	教授 磯道義典	人工知能における推論, 学習, 情報化社会論
〃	教授 久保泉	ランダム現象の解析, エルゴード理論
〃	教授 桑田正秀	実験計画法
〃	教授 正法地孝雄	統計学およびその応用に関する研究
〃	教授 水上孝一	最適制御理論, 微分ゲーム理論と応用, 情報処理学
〃	教授 山縣敬一	計算機システム, 計算機援用設計
〃	助教授 中原早生	ソフトウェア基礎理論
〃	助教授 西井龍映	数理統計学およびその応用
〃	助教授 原田耕一	システムプログラム, 計算幾何学
〃	助教授 間瀬茂	数理統計学, 平面点過程理論
〃	助教授 宮尾淳一	視覚化言語によるプログラミング開発環境
〃	助手 石原哉	構成的な数学およびプログラミング
基礎科学研究	教授 板野暢之	超関数論とその応用
〃	教授 江口正晃	等質空間上の調和解析
〃	教授 西浦廉政	非線型解析
〃	教授 水田義弘	ポテンシャル論
〃	教授 吉田清	関数解析と偏微分方程式
〃	教授 吉田敏男	位相幾何学
〃	助教授 阿賀岡芳夫	微分幾何学
〃	助教授 伊藤史朗	可換環論
〃	助教授 岩上辰男	二次形式論

講座等	教官名	研究題目
基礎科学研究	助教授 加藤久男	シェイプ理論・連続体理論
〃	講師 宇佐美広介	微分方程式論
〃	助手 関根光弘	位相幾何学
〃	助手 和田涼子	函数解析

(物質生命科学コース)

講座等	教官名	研究題目
情報行動基礎研究	教授 天野 實	両性類の発生・分化機構, 変態期における肝細胞の分化
〃	助教授 渡邊 一雄	細胞増殖, 細胞分化の調節機構
〃	講師 清水 典明	ヒト血液細胞の分化に関する分子細胞生物学的研究
〃	助手 河原 明	細胞分化のホルモンによる調節機構
基礎科学研究	教授 大林 康二	物質のレーザー分光・極低温物理
〃	教授 好村 滋洋	先端機能性材料の構造と物性
〃	教授 永井 克彦	超流動, 超伝導等の低温物性理論
〃	教授 檜原 忠幹	核磁気共鳴による物質の磁氣的性質の研究
〃	教授 藤井 博信	先端機能物質の開発とその基礎物性の研究
〃	教授 松田 正典	高エネルギー物理学(素粒子の強い相互作用の理論研究)
〃	教授 渡部 三雄	液体およびアモルファス物質の構造と物性の理論
〃	助教授 宇田川 眞行	超低温物理・レーザー分光
〃	助教授 内海 和彦	低温度の分光学的研究
〃	助教授 高 昂 敏郎	超伝導および重いフェルミオン物質の開発
〃	助教授 武田 隆義	先進材料物質の構造と物性の研究
〃	助教授 竹之内 勝美	流体の運動と拡散, 電磁流体力学
〃	助教授 田村 剛三郎	半導体物理学
〃	助教授 星野 公三	液体およびアモルファス物質の構造と物性の理論
〃	助手 浴野 稔一	酸化物高温伝導体の研究
〃	助手 荻田 典男	極低温物理・物質のレーザー分光

講座等	教官名	研究題目
基礎科学研究	助手 小島 健一	核磁気共鳴による物質の磁氣的性質の研究
〃	助手 嶋原 浩	強相関電子系の磁性と超伝導の理論
〃	助手 瀬戸 秀紀	構造相転移に伴う多様な現象の研究
〃	助手 細川 伸也	半導体物理学
自然環境研究	教授 岡野 正義	生物活性を有する天然有機化合物の構造と活性との相関
〃	教授 武森 重樹	ステロイドホルモン生合成の分子機構
〃	教授 山下 和男	光・電子変換, 光情報記憶・表示機能材料の開発
〃	助教授 赤堀 興三	光合成における光エネルギー変換機構の研究
〃	助教授 小南 思郎	ステロイドホルモン生合成電子伝達系の膜再構成系
〃	助教授 播磨 裕	機能性有機分子材料の研究開発: 基礎物性と応用
〃	助教授 深宮 齊彦	生物活性を有する天然有機化合物の構造と活性との相関
〃	助手 山崎 岳	ステロイドホルモンの生合成機構

(自然環境研究コース)

講座等	教官名	研究題目
基礎科学研究	助教授 成定 薫	科学の制度化に関する比較研究および環境思想史
自然環境研究	教授 倉石 晉	植物ホルモンおよび細胞壁の環境による変化
〃	教授 佐田 公好	微古生物に基づく層位学的ならびに地域地質学的研究
〃	教授 高橋 史樹	生物群集の動態に関する応用生態学的研究
〃	教授 坪田 博行	海水の流動と物質の循環
〃	教授 根平 邦人	森林構成植物の比較生態とコケ植物の比較生物学
〃	教授 林 七雄	生物間の化学交信物質
〃	教授 福岡 義隆	盆地及び海岸の都市気候に関する熱収支的研究
〃	教授 堀越 孝雄	攪乱地の微生物の生理・生態学
〃	助教授 於保 幸正	変成岩及び非変成岩の地質構造形成史
〃	助教授 開發 一郎	地中水・蒸発散に関する水文・気象学的研究
〃	助教授 日下部 眞一	生物の適応進化に関する集団遺伝学及び分子進化学

講座等	教官名	研究題目
自然環境研究	助教授 櫻井直樹	植物の生長・分化におよぼす環境要因の役割
〃	助教授 佐藤博明	火山岩の生成過程
〃	助教授 富樫一巳	森林の生物群集の動態, 特に森林に住む昆虫をめぐって
〃	助教授 中越信和	種個体群・生物群集の生態と植生景観の解析
〃	助教授 中根周歩	生態系とその攪乱地の物質循環; リモートセンシング
〃	助教授 藤原祺多夫	環境試料における微量元素・物質の計測法の開発
〃	助教授 堀 信行	第四紀環境変遷と地形発達及び土地の環境地理学的研究
〃	助教授 本田計一	動植物の生活に關与する信号化学物質
〃	講師 海堀正博	土砂災害の発生機構と防止・軽減対策
〃	講師 早瀬光司	水圏有光層に於ける有機・金属錯体の地球化学的研究
〃	助手 古賀章彦	生物の適応進化に関する集団遺伝学及び分子進化
〃	助手 設楽惣助	微生物無機窒素代謝の生理・生化学的及び生態学的研究
〃	助手 高橋日出男	東アジアの梅雨に関する総観気象学的研究
〃	助手 竹田一彦	高感度分光分析法の研究開発および環境試料への応用
〃	助手 中坪孝之	各種荒原の植物・微生物の生理生態学
〃	助手 児子修司	古生代の生層序と地史
〃	助手 原 茂樹	生物個体間に作用する活性物質

(生体行動科学コース)

講座等	教官名	研究題目
情報行動基礎研究	教授 内山敬康	ヒト血液細胞の分化, 増殖, 機能発現の制御
〃	教授 重中義信	細胞骨格の微細構造と細胞運動の研究
〃	助教授 上領達之	細胞内小器官の形成とそれを調節する遺伝子の働き
〃	助教授 田所佑士	物理化学, 生体高分子集合機構論
〃	助手 田中琢磨	生体高分子の物理化学
〃	助手 平野哲男	ヒト血液細胞の分化, 増殖, 機能発現の制御
人間行動研究	教授 上里一郎	人間行動のセルフコントロール, 異常行動の機制と治療

講座等	教官名	研究題目
人間行動研究	教授 黒川 正流	集団の人間関係とリーダーシップの効果の研究
〃	教授 小林 惇	動物の運動・行動の神経生理学的基盤
〃	教授 生和 秀敏	不安の発生と解消のメカニズムに関する実証的研究
〃	教授 堀 忠雄	睡眠脳波の情報処理, 行動のウルトラディアン周期変動
〃	教授 宗岡 洋二郎	神経情報伝達物質の生物学的研究
〃	助教授 安藤 正昭	動物の環境に対する適応の仕組を明らかにする
〃	助教授 西村 良二	精神病理からみた自我形成の生物学的, 心理社会的研究
〃	助教授 林 春男	災害時の人間行動, 都市化社会の人間関係
〃	助教授 藤原 武弘	コミュニケーション過程に関する社会心理学的研究
〃	講師 坂田 省吾	動物の時間知覚に関する生理心理学的研究
〃	助手 洲崎 敏伸	単細胞生物の微細構造と細胞生理学
〃	助手 林 光緒	日中の眠気における精神生理学的研究
保健体育	教授 菊地 邦雄	骨格筋の発達と筋力トレーニングの運動生理学的研究
〃	教授 小村 堯	中高年者の運動処方に関する研究
〃	教授 調枝 孝治	運動学習の研究
〃	教授 難波 紘二	リンパ節のがん(悪性リンパ腫)の研究
〃	教授 西田 芳郎	原形質の流動に関する生理学的研究
〃	助教授 荒井 貞光	人間・社会とスポーツとの望ましい関わり方の研究
〃	助教授 笠井 達哉	随意運動機構の運動学的および運動神経生理学的解析
〃	助教授 楠戸 一彦	ドイツ中世後期の都市におけるスポーツ
〃	助教授 新畑 茂充	長距離走, マラソンにおけるトレーニングの最適化
〃	助教授 橋原 孝博	バレーボールに関する運動学的研究
〃	助教授 山崎 昌廣	身体障害者の体力医学的研究
〃	講師 小宮山 伴与志	運動調節の脊髄機構およびその発達運動学的研究
〃	講師 和田 正信	運動による筋肉タンパク質の変化
〃	助手 入澤 雅典	水泳に関する運動学的研究

講座等	教官名	研究題目
保健体育	助手 磨井 祥夫	スポーツ動作とスキル
〃	助手 高橋 裕美	運動による酸素運搬・利用系の変化

(学生相談室)

講座等	教官名	研究題目
	助手 岩村 聡	カウンセリング, エンカウンター・グループ
	助手 大河内 浩人	心身がリラックスする方法の研究

(平和科学研究センター)

講座等	教官名	研究題目
	教授 松尾 雅嗣	言語的差異と不平等の分析
	講師 佐藤 幸男	現代国際紛争の分析と南北問題
	助手 田村 佳子	労働者教育, 女子労働者教育

総科サークル 大集合っ!!

総科バドミントン

～さあさみんなでピーヒャララ～

毎週水曜と金曜の5時ごろから、メンバーがぞろぞろと中スポへ集まって、混みあうコートで2～3面占領してバドをします。ラケットやシャトルを貸してもらえるので、気軽に参加できます。気合の入った試合もします。手軽にできて、かつ奥が深いバド。ここでは初心者も経験者も一緒になって、好きなように自分のバドを楽しみます。また、中スポを出たあとのアフターバドは、親睦を深める時間。みんななかなか帰りません。こんな総科バドも着実にレベルはアップ。一昨年は惨敗した秋の学内大会も、昨年は敗者復活優勝など、トーナメントの下の頂点を独占し、勝利のクッキーに酔いしれました。今年は夏の(強化?)合宿も四国で行ない、秋を迎えますます盛り上がりそうな総科バドです。

総科バスケ

総科バスケ、いいかげんなサークルである。しかし、総科のサークルの中では一番歴史のある由緒正しき(?)サークルなのではないだろうか。

最近では総科と名乗るのは不適切なサークルになりつつある。教育学部がいたり、高校生がいたり、工学部が増えてきたり…。だが、バスケをやろうという奴等が集まってきていることに変わりはない。(中には練習には来ずにコンパ要員として所属している奴もいるのだが…。)

練習日は月曜と木曜。時には10名揃わないこともある。雨の日はまず間違いなく揃わない。こんなサークルが何故今だに存続しているのか不思議だ。

4年前に発足した総科バレーは、毎週2回水曜と金曜に放課後中区スポーツセンターで活動しています。毎週参加する人数は18～24人ぐらいで、6人チームが3～4チームつくれます。活動内容は、ただ身内で和気あいあいと試合をするだけです。中区スポーツセンターは利用者がとても多くてバレーを1時間しかできなかつたり、予定している開始時間に始められないこともあります。みんな楽しくバレーをしています。夏には合宿も行います。でもその合宿でバレーをする時間はほんの少ししかないのは気のせいです。秋には広大な体育館で行われるフェニックスバレーに参加して自分達の実力を試しています。普段練習をほとんどしていないので実力は想像つくでしょう。冬にも合宿を行います。でもその合宿でバレーを全然せずにスキーばかりしているのは気のせいでしょう。このようにバレー好きのいろんな性格で遊び好きの仲間がいる総科バレーは楽しいサークルですよ。

ボンビーギャルズ

総科ソフトの季節になると突如として彗星の如く現れてくるのが我らがボンビーギャルズである。妙に元気な01の女子で構成されているのだがメンバー全員が揃うのはなかなか難しい。練習場所もとれたりとれなかつたりでなかなか定まらないし、練習日も毎週土曜は大体行うのだが、その他の曜日はメンバーの都合でなかなか行えないという実態である。しかしそれでも総科ソフト前の皆の情熱といったらものすごい。弾丸強烈ノックをうけながら至る所に青アザをつくりながらもすくっと立ち上がる。体でボールだつてとめちゃうんだぞー。(といってもグローブに入らないだけなんだけどねぇ。)という調子で私達は頑張っているという訳なのだ。わっはっはー。

しかしやっぱり女の力には限界があるのかなーと、ひしひしと感じる事も多いけど、それでもやらねば。12点のハンデをもらいながら(皆な、ごめんねー)ボンビーギャルズは突き進むのである。

ソフトボール大会の報告

去る6月9日に、春季ソフトボール大会が催されました。前日までは梅雨とは思えない程の好天が続きました。が、9日は朝から小雨模様。それもそのはず、天気予報では、「降水確率50%」（こっこの日に限って、そんな一。）おかげで、8時30分にプレイボールしたものの試合を始める間もなく雨が激しくなってきた、「一時中断」このまま中止になるかと思いきや、私の、じゃなかった総科生の思いが天に通じたか、9時位には雨も止んで、絶好のソフト日和となりました。

さて、試合の方はというと、去年と比べて1年生が活躍したようです。7チーム中3チームが1回戦を勝ち抜いたんだから、すごいもんです。特にチューター③チームなんかはおもしろい。朝1番の試合で、他のコートが雨で試合を始められないうちに、「勝ち」を決めてしまいました。不戦勝です。相手チームが9人いなかったんです。私のいたチームなんですけどもね…。



ここで、その「02物生」のその後をみてみましょう。まず9人そろっての1回戦（といっても敗者復活の）は「M環境」でした。このチームはシードでしたが、強い「01生体」のちの優勝チームと対戦して負けてきたのです。結果は私のいたところが勝ちました。といっても同点のまま時間切れとなりジャンケンです。このジャンケンでは某人物が大変活躍しました。2回戦になると、みんな調子ができて、相手の「M1物生」と乱打戦を展開したとでもいっておきましょうか。ところが結果は、また同点。またジャンケン。「M1物生」の方が3回戦へ行きました。この「M1物生」は結局、敗者トーナメントの決勝戦へ行き、「01物生」とすばらしい試合をして優勝しました。おめでとうございます。そういえば今から思うと、「02物生」との試合では、同点とはいえ強かったですからねえー「M1物生」は…。

おっと、すっかり自分のいたチームのことばかり書いてしまいました。

ここで、正規トーナメントの方の決勝戦である「01生体」vs「02生体」をみてみましょう。まずその前に軽く1回戦からの得点などをみると、「01生体」は1回戦15対3、2回



戦10対1, 3回戦10対5, 準決勝の4回戦16対12と, さすが決勝進出とあって他をよせつけない圧勝が3回戦まで続き4回戦も高得点をあげています。一方「02生体」も, 6対3, 9対7, 7対2, 8対6と順調に勝ち進んで来ました。これだけの2チームがやるだけあって, 試合はとてもレベルが高く, ファインプレーも続出で, エラーもほとんどないというまさに白熱した戦いでした。5回の裏「01生体」3対4でむかえながらも, レフトオーバーの「さよなら」。5対4で「01生体」の優勝です。おめでとうございます。本当に素晴らしい試合でした。

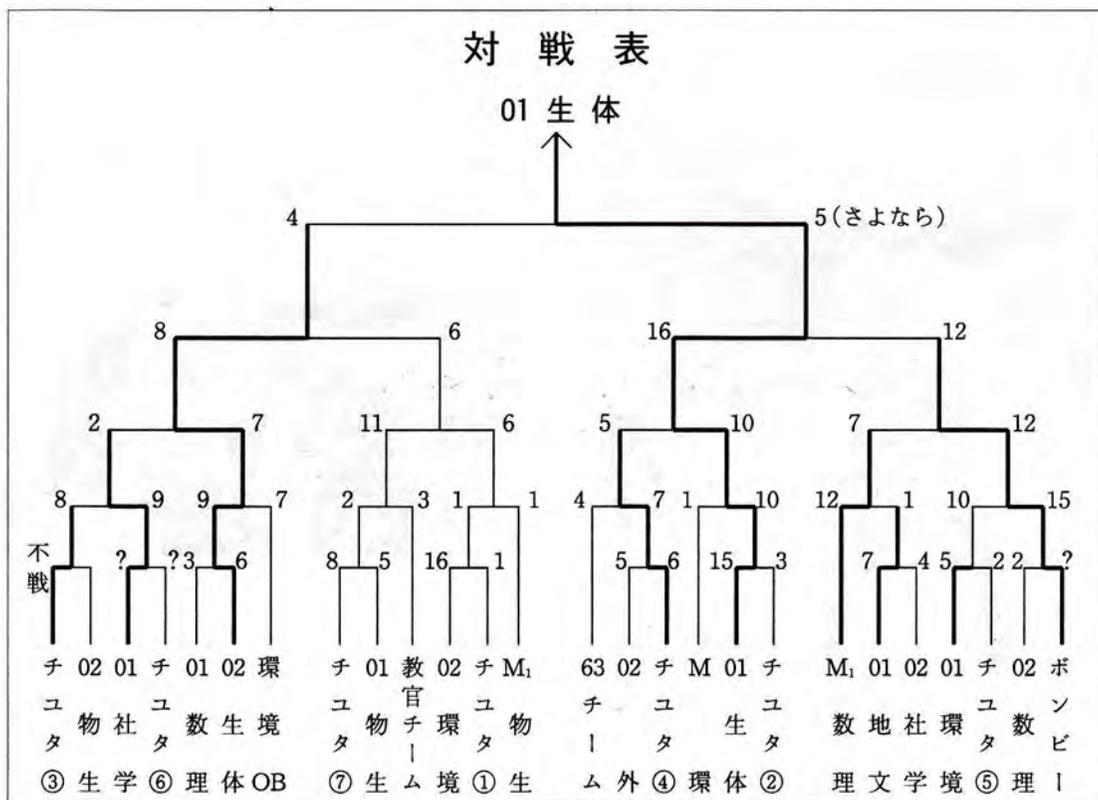
③この決勝戦が終わった後も試合をしている所がありました。3-4位決定の「教官チーム」対「ボンビーギャルズ」です。まず「教官チーム」の方はコースの枠を越えて色々な先生のいるチームで, ピッチャーは私の知っている某先生なにかしでした。一方「ボンビーギャルズ」の方は, 9人中7人が女のこのチームですが, 「なんだ女かー。」などと思うと手痛いしっぺ返しをくらわされるような実力を持つ上にかわいい人ばかりです。でも試合の非

情さといいたましようか, 「教官チーム」も手かげんなどするはずありません。結果はボンビーのおい上げもむなしく18対15で「教官チーム」が勝ちました。

ところで, 他の試合にも様々なドラマがありました。みんな楽しく過ごしたことでしょう。(翌日やっぱり, 筋肉痛かなー。)その全てが書けないのが残念です。

最後になってしまいました, グランド整備やボール, グラブ等, 備品の用意片付けを早朝から夕方過ぎまでされた方々, 本当に御苦労様でした。

(文責 内田 知宏)



十一日目 ～その後の四番目の魔道士～

山本 みつね

青白い光に浮かびあがった影が揺らいで、止まった。

両脇を歩く魔物どもがビクッとしたように足を止め、私を窺った。が、私は別段、何をしているわけでもなかった。ただ、通路脇にひらけた小部屋の中に目を当てて、佇んでいるだけであった。

「歩け」

一匹の魔物が恐る恐る命じる。私はそれを無視した。

「歩かないか、人間」

「——あれは何だ、魔物」

私は部屋の中を指した。魔物どもの指図を受ける覚えはなかった。魔物どもは鼻白んだが、それでも私に対する恐れの方が勝ったのだろう。中の一匹が答えた。

「水晶球だ」

「そんなことは見ればわかる。私が訊いているのは、何の為に使われているのか、ということだ」

「……そ、それは……ある大切な用途だ。答えるわけにはいかん。さっさと歩け」

台詞はともかく、震えながらでは迫力も強制力もなかった。私はうすすらと笑うと、誰の耳にも入らぬほどの声で何ごとか呟き、それから再びうすと歩き始めた。魔物どもがホッとしたように続いた。

邪悪なるひとつ目一族と私たちとの戦いも、十一日目だった。私、黒魔道士ヴィラバドラが戦列に加わってからは、六日目であった。その六日の間で、状況は大きく変わった。魔物どもと三人の魔道士たちとの間で拮抗していた力関係が、私の参戦によって著しいバランスの変動に見舞われた為である。魔物一族は大陸の北端へと逐いやられていった。つい数日前まではあれほど隆盛を誇っていたのが、今や封じられる一歩手前であった。

だが、詰めの一手が私たちにはなかった。勢力衰えたりと言えども、まだ一族の力、特にその長として一族の頂点に立つものの力は

侮り難い。それを封じるのは、至難であろうと思われた。

そして——私、"ルドラ殺し"、ヴィラバドラは、その魔物どもの崇め奉る一族の長の居る筈の"神殿"に、今、ひとり足を踏み入れている。

何故？

同志たちですら、恐らく私の真の意図は知るまい。私が何をしようとしているのか、何故私が残る全ての力をこの役目に傾けようとしているのか、その全ては。

無論、彼らは、この役目を負った者に生きて戻れる可能性が乏しいのだとは知っている。私がこの役目を自らに課した時、三人が三人とも、顔色を変えて翻意を促したのだから。

『奴らの所に乗り込む!? 無茶な! 死に行くようなもんだぞ!!』

『お願い、囮になろうなんて、そんなことは考えないで!』

『僕は、君の、いや誰のだろうと、犠牲なんて欲しくない——考え直してくれ、ヴィラバドラ!!』

ガルダ、シュリー、カルキ。皆、心から私を引き止めてくれた。"闇"と取引し力を得た黒魔道士であるこの私を、真実失いたくないと願ってくれたのだ。

だが、私は、だからこそ、初志を曲げなかった。彼らの思いが本当であればあるほど、私はそれをやらなければならなかった……

「そっちじゃない! こっちだ!」

魔物どもが口々に警告し、私のローブの袖を引く。私は無言で魔物どもを見下ろした。かすかに笑ってみせる。袖をつかんでいた魔物が、慌てふためいて手を離した。余程私が恐ろしいらしい。別段私に格別の力があるわけではないが、たまたま私が戦列に加わってから大きく戦局が変わった為、私の力を過剰評価しているのだろう。

「は、早く来ないか……」

「また水晶球があるな。あれも『ある大切

な用途』に使うのか」

私は平然と指差した。かたわらの部屋に、さっきと同じ、磨きあげられた大きな水晶球が据えてあったのだ。

「答える必要はない」

いくら私が怖くとも、それだけは教えられないというわけか。が、私には実はその反応で充分なのだ。私は再び小声で魔道語のフレーズを呟くと、水晶球から視線を外した。また魔物どもは安堵したように息をついた。

更に上階に足を踏み入れると、一族の上位種族である羽ある魔物どもが待っていた。こいつらに身柄が引き継がれるというわけだ。それまで私を案内してきた魔物どもは、厄介事が手許から離れることに、明らかにホッとした様子だった。

私が彼らの去ってゆくのを見送っていると、声がかげられた。

「何の魂胆があって来た、人間」

私は振り返り、無表情に相手を見つめた。もう随分と見慣れたのでさほど感じないが、やはりこの目がひとつしかない顔というのは余り気持ちの良いものではない。

「お前たちに話すことはない」

そっけなく、私は言った。羽ある部族どもはギロリと私を睨んだが、私の瞳に恐怖のかけらさえ浮かばないので、取り敢えずは自分たちの役目を果たすことにしたらしい。

「歩け」

私は、薄く笑うと、歩き出した。

暫く行くと、またも水晶球が、今度は通り道の部屋の中央に置かれていた。私はそこへ近付くと、台座を見つめた。文字が彫ってあった。人間世界のどんな文字でもなかった。ふと見ると、かたわらに、ちっぽけな像が、やはり磨きあげられて置いてあった。ひとつ目で三本の角を生やした化物の像だ。私はかすかに身震いすると、それから目をそむけた。

「何をしている？」

「この水晶球を見ていたのだ」

「触れてもいいのだぞ」

魔物は口を歪め、悪意たっぷりに言った。流石に上位種族ともなると、私をいたずらに恐れてはいない。もっとも、過去幾度も痛い目を見ているだけに、馬鹿にしてもいないが。

「結構。わざわざこんな所で命を捨てる為に来たのではない」

「ふん——何処までも憎たらしい奴め」

抑えた害意が背中に感じられた。私は水晶球に目を戻した。水晶球は私の姿を映そうともしなかった。禍々しい闇だけが揺れていた。触れれば命はあるまい。魔道士である私の目には、邪悪な力がこの水晶球に満ちているのが見えるのだ。私も今度は用途など尋ねなかった。見ただけでわかったし、下手に魔物どもに怪しまれたくない。私は三たび魔道語を呟くと、そこを離れた。

「言っておくがな、人間」

羽ある魔物の一匹が、そんな私に向かって毒を含んだ口調で言った。

「我らが長たるお方は、貴様ごとき木っ端魔道士にはびくともせぬ偉大な力をお持ちなのだ。もしそれをたったひとりて倒せると思って来たのなら、許し難い不遜だぞ」

私は静かに言い返した。

「その木っ端魔道士にこの地まで追いやられたのは、お前たちの方ではなかったかな」

「——!!」

私を取り巻く害意は、殆ど殺意にまではねあがった。だが、抑制が勝つたらしく、魔物どもはそれ以上何も言わず、再び私の前と後ろに立った。

……昨夜、私は夢の中に女神と邂逅した。女神はこの私に、何ゆえかの一族がこの大陸にはびこったのかを語り告げた。

『かつてあなたが葬り去った黒魔道士ルドラは、ずっと以前、魔世界からかのひとつ目一族の長を人間世界に召喚しました』

私は、いや恐らくは体と切り離された私の魂は、広大な宇宙空間でたったひとり、金色に輝く女神と向かい合った。神など信じない私だし、相手もまた自ら神とは名乗らなかったが、その時相對した存在は、女神としか言いようのないなにかだったのだ。

『ルドラは、性質はともあれ力のある魔道士でしたから、当時人の住んでいなかった大陸北部に一族を押し留めました。一族の長がこの地上で存分に力を振るうのに欠かせない"あるもの"を彼が握ることで……。それは、およそ五百年の間続きました。その間、ひとつ目一族はその地で独自の"文明"を築き、そうしながら機会を窺っていました』

『……まさか……』

私は、我にもあらず震えた。女神の言葉半ばで、私には、女神が何を語らんとしているのか、わかっ

てしまったのだ。

『私がルドラを殺したのが……かの一族を解放する引金になったというのか……!!』

『あなたは憎しみに任せて闇と取引し、その力を以てルドラを滅ぼしました』

女神の声は沈んだ。

『ルドラの死に配下の黒魔道士たちが右往左往する間に、ひとつ目一族は、ルドラが押さえていたあるものを手中に収め、一気に大陸中に勢力を広げた……これが真相です』

『では、私のしたことは……私のしたことは!?』

『あなたは、他の三人の求めに応じて立ちあがりました。それは、知らず間接的にとはいえ大陸の人々に死と災厄を解き放ってしまったあなたにとって、為し得る最善の道だった。我々はそう考えています』

女神はなだめるような、穏やかで温かな波動を伝えてきた。私は、頭を抱えて喚き出したい気持ちをかろうじてこらえた。

『……彼の力は、三体の小さな像フィドルに由来します』

やがて、女神は言った。

『その像が特別に磨かれた水晶球に映されると、像に潜む力が水晶球を通じて彼のものとなるのです。彼とその一族を元いた魔世界へと封じ込めるには、そうやって注ぎ込まれる力の流れをまず断ち切らねばなりません』

『ルドラの握っていたあるものとは、その像のことか』

『その通りです。像は彼を模した形をしており、これを破壊することは不可能に近いでしょう』

不可能？ ならば、どうやって力の流れを断てというのだ？ そう自問しかけて、私は答を見出した。そうだ……水晶球だ……。

目を覚ました私は、同志たちもそれぞれに女神からの啓示を受けていたことを知った。

『彼の地上での力の源である三つの像に対抗する為に、三つの女神像を地上に遣わしたと……その像にある三つの対応する花を捧げ、一族の封印を祈れと……』

白魔道士カルキは、厳かに語った。

『その為に何処でどんな協力者に会えるかを、オレは聞いたぞ！ 女神像が何処にある

かもだ!』

赤魔道士ガルダは、頬を紅潮させて語った。

『わたしは……その三つの花の名と、咲く場所を……そして、わたしたち自らの手でそれを摘み、祠ほこらへ赴くようにとすることを』

緑魔道士シュリーは、静かな熱を裡に秘めて語った。

『——ヴィラバドラ、君は?』

カルキが問うた。私は『何も』と答えた。ガルダが目を見開いた。

『そんな——嘘だろ?』

『私は神など信じていない。私の所へやってくるものがあるとすれば、それは私の命の残りを告げに来る闇の王の使者だ』

私はつとめてそっけなく言ったが、シュリーに真っすぐ見つめられて、思わず目をそらしていた。彼女の海の色の瞳は苦手だった。彼女は、決して人を責めない。ただ、深い悲しみを湛えたその瞳でじっと見て、静かに相手の名を口にするだけだ。だが、それがどれほど私の心に対しては効果を及ぼすか、彼女は知るまい。

『ヴィラバドラ……』

『……話すべきことは何もない』

私は頑なな声を出した。

『私は、お前たちとは違う。私は、自分の為すべきことしか知らない』

『やっぱり、あなたも金色の女神こんじきと言葉を交わしたのね……』

『そんなことはどうでもいい。私は彼の所へ、お前たちの為すことから目をそらさせる為に行く。それだけのことだ』

訳のわからぬ苛立ちに任せて、私は吐き捨てた。三人は仰天して私を止めたが、私は耳を貸さなかった。

私には、彼らに愛される資格などなかった。私こそが、あの非道なルドラでさえ解かなかったかの一族の封印を解いた男なのだ。知ってやったか否かはこの際問題ではなかった。私とその引金を引いたという事実だけが、私にとっては重要だった。

妙な言い方だが、その時初めて私は、自分がまだ生きていることを感謝したのである。私の命は、闇世界の王との契約によって私の

魔道の力と直結している。私がまだ生きていうことは、私がまだ魔道を使っただか一族と対峙することが出来るということなのだ。

元から生き延びる気はなかったが、女神との邂逅は私に真実死を選ばせたのであった。

どうしても私が決心を変えぬとわかると、同志たちは不承不承ながら私の提案を受け入れてくれた。そして、彼ら自身の役目を果たすべく、旅立っていった。

『きつと——きつと迎えに行く。命を無駄にしないでくれ』

「白き魔道士は言い、右手を差し出した。一見優しいが、鋭い青年だ。黒魔道士である私に嫌悪感があったらうに、私を仲間に迎えようと言いだしたのは彼だ。私は黙って微笑むと、黙ってその手を握った。

『畜生、バカヤロー、死ぬなよ！』

短くて乱暴だがそれだけに意を尽くした台詞は、「炎使いのものだった。怒りっぽいところはあったが、真っすぐで、そして意外にひょうきんな青年だった。年を経て角が取れば、きつと誰からも愛され親しまれ頼りにされる魔道士になることだろう。私は言った。

『お前こそ、長生きしてくれ』

『へっ、こちとら、千年だろうが二千年だろうが、ピンピンして生きてやるさ！』そしてな、お前と、茶を飲みながら、あの頃は、って話すんだからな！』

ニッと笑おうとして、しかし笑い切れず、彼は唇を引きつらせた。私は否とも応とも言わず、黙って手を差し出した。彼は少し乱暴にその手を握った。痛かった。

最後に、「大地の子」が残った。

最初に彼らと会った時も、確かそうだった。カルキが行き、ガルダが去り、そしてシュリーが残る。そのシュリーもいずれは去り、私はひとり残される。私は微笑した。出会いも、別れも、結局は私ひとりが残って終るのだ。

『ヴィラバドラ……』

彼女は、私の名を呼んだ。

『ヴィラバドラ……』

『行くがいい。行って、お前の為すべきことを果たせ』

私は、穏やかに言った。大地の恵みの黄金色に揺れる髪と、大海の底の碧を湛えた瞳とを持つ乙女よ。私の前に留まるな。お前には、汚れなき白い心の、高貴な魂を瞳に映すあの青年こそが相応しい。

『お前は優しい。その優しさ故に目を曇らせるな。私は……お前たちに愛されてはならなかったのだ』

『そんなことは決してないわ……』

彼女は涙顔で微笑んだ。

『現にわたしたちは、あなたの表面の姿を突き抜けた奥にあるあなたの魂を愛しています』

『それがわからぬほど、私は愚かではなかった』

『ああ、だったら何故……！』

『だからこそ』

私は静かにかぶりを振った。

『愛される資格のない者が愛されてしまったからこそ、愛されてはならなかった者は、そうでない者より一層、その愛に報いるだけのことをしなければならぬのだ』

彼女は息を呑み、声を詰まらせた。

『シュリー。私には、かの一族と戦うことを選んだ最初から、自分が死に向かうとわかっていて。同じ死なら、私の望むように生きた結果でありたい』

『ヴィラバドラ……』

『さあ、もう行ってくれ。夜が明ける。私を選び取ろうとしている死を少しでも無駄にすまいと思ってくれるなら、一刻も早く、花を摘み、祠に供えてくれ』

シュリーは、何か言おうとした。私はかぶりを振った。そして、早く行けと手を振った。彼女はやむなく行きかけ、だが不意に振り返るや、私の腕にすがりついた。

『おお、ヴィラバドラ——あなたがそういう人だからこそ、わたしたちは、いえ、わたしは——』

『……私は、誰も愛さない』

私は呟いた。

『早く去れ。時が移る』

シュリーは、万感の想いを込めたまなざしを私にひたと当てた。私はゆっくりと頷くと、自分の手をその美しい指から抜き取った。シュ

リーは、想いをもぎ離すように私に背を向けた。そして、駆け去った。一度も振り返らなかった。私は、その後ろ姿が見えなくなってしまっても暫く、場に行んだ。二度と会うことのない、本当は限りなく慕わしかった面影を、折からの朝日の中に追いつけた……

「此処を上れ」

魔物の声が、促す。

階段を上ると、細い通路に出た。強烈な邪悪さが押し寄せ、流石に心穏やかではいらなかった。いよいよだ。いよいよ、かの一族の頂点に立つ、彼の居座に近付いたのだ。

(タルガルよ)

私は思わず、闇世界の王の名を胸裡に呟いた。

(私の命、あとどれくらいかの力、と引き換えられるものなのだ。私の目論見を果たせるだけ、残っているのか)

答はなく、扉が迫った。魔物どもが取りついて、うやうやしく開く。

此処をくぐれば、もはや彼らに、この六日間という短い間を共に過ごし戦った彼らに再び見えることは適うまい。彼らが女神の祠に花を捧げる時、私はこの身に残された力を全て放つつもりでいる。此処へ来るまでに見か

けた三つの水晶球には、既に術をかけてある。恐らくは彼の許にある水晶球、三つの水晶球に注がれた力を受け取る為の水晶球、私がそれを破壊する呪文を口にする時、あの三つの邪悪な珠も同時に砕け散るだろう。その一瞬こそが、私が最後の命を力に換えて彼とその一族を彼らの棲むべき魔世界へ送り還す時なのだ。私は、唇に薄い笑みを浮かべた。それまでは魔道は使わぬ。たとえ、この身に凶刃が突き立てられようと、ただその時まで命が尽きぬなら。

カルキ。ガルダ。そしてシュリー。

この姿で、ヴィラバドラとしての姿で会うことは二度とない。私は、お前たちが好きだった。だからこの道を選んだ。だが、お前たちは生きるのだ。お前たちには、その資格がある。お前たちは人を、この私さえをも愛した。ルドラを憎み、その全てを奪うことに半生を費やした私には、お前たちの光は眩し過ぎた。透き通るほどに純粋な光も、木洩れ陽と水面の煌めきも、烈火の輝きも、全ては私には痛いほどに。

私は、足を踏み出した。彼とその一族とが、私を待っていた。



♪ じゃんじゃかじゃーんの 編集後記

「じゃあ今度の編集長頼むよ。」そういわれた時、3年生1人という事で予期してはいたもののサーッと血の気が引く思いだった。とうとうきたかっ。恐れていた事が現実…。はっきりいって本当にドジでオッチョコチョイな私である。私にできるのだろうか…不安で胸は一杯であった。そして第1回編集会議。集まったのは私を含めてたったの3人。こ、これは一体。涙の飛び散る思いだった。もう飛翔なんてやめてやる…なんて言う事もできず委員集めに必至であった。そして今、どうにかこうにか毎週水曜15:00、社会文化研究室には6~7名の顔ぶれが必ずそろそろようになり私もいっばしの編集長気取りであーでもない、こーでもないといつべこべ言っている。そしてやっと念願の41号が出来上がるに至ったのである。皆な、ほんとにお疲れさま。そしてありがとう!!

さーってと、そんじゃあまあ 皆さん、恨みつらみございましたら何でも言いたい放題好きにしてくれー。すっきりした所で次号もがんばろうね。もう逃げられないよ♡

(01生 岡村 美穂)

学問分野を分けるということは、結局のところ世界がどういうふうになり立っているのかを考えることになるわけで、今回の特集ではインタビューに協力していただいた先生方の学問観、世界観が垣間みられたような気がして、私自身も考えさせられるところがありました。

(03生 古田 智子)

「編集部員」と名前はあっても、実際やったことは先生方へのインタビューだけだった。「総合科学部とは何か？」—これが解けたら悟りが開けるんじゃないか—と思えてくるほどの難問ですね、これは。

(02生 南場 千里)



編集なんて仕事は初体験♡だったので、今は無事にクリアできてホッとしております。

しかし、メ切日が迫ってくるのがこんなに恐ろしいことだったとは、原稿を書く身になってようやく分かりました。

次の飛翔を出す時にも、またこの恐怖を味わうことになるでしょう。いやあ、楽しみだなあ。はっはっは。(ひきつった笑い)

ところで最後に、むりやり原稿を依頼してしまいいながら、快く引きうけてくれた野見山君、本当にありがとうございました。

(03生 中島 英紀)

手伝いますと言っているうちに終わってしまった。役員になったときからすでに、自分の事で手一杯で、飛翔までは手が回らないのでは、と思っていたが、本当にそうってしまったようだ。

それにしても役員さんのパワーはすごい。ただただア然として見るだけの私。飛翔がこんなエネルギー的なものだったとは。頑張ったみなさんに、せめて私は心からお疲れ様を言いたい。本当にお疲れ様でした。

(02生 蟹由 昌美)

私は物生三年の平凡な学生である。今年五月から「飛翔」編集に携わっている。

私が「飛翔」編集に参加しようと思った理由は色々ある。しかし最も直接的な理由は、飛翔40号のS教官の退官の辞である。私は彼を全く知らない。しかし彼もまた、自分が夢見た総合科学を実現させる事なく、ここを去っていった。

世間一般では、夢を見られるのも大学のうちと言われている。ならば今、大きな夢を見てやろうではないか。問題なのは、大学が徐々に夢を見られる環境でなくなっている事なのだ。

P.S. さあーて、入稿も終わったし、みんなで飲み行こかあ!!

(01生 大村 尚)

さて、私ももう2年になった。この3セメの間は結構忙しかった。と言うのも空コマの数では1年のときと、さして変わらないのに、一般教とは違って専門の授業はレポートが多いこと、多いこと。その上(結構好きだが)前回予告していたとおりの‘仏’なるものをとったため、かなり勉強時間が増えた。この‘仏’は、クラスの人数も少なく学習意欲もわくので私のおすすめだ。私も時間の許す限り、4セメ、5セメ、ととっていきいたいななどとまたも無謀な考えをもっている。(そういえば、3セメのは単位あったけかなー)

一方、いつも季節外れのことばかりだけど、90-91ski シーズンは少雪に始まってハラハラしたのに1、2月は寒波もきてそこそこ降った。一部を除いて大雪だった。91-92ski シーズンはどうなるのかな。でも、100年ぶりの少雪のとある地方のオバチャンは、雪降ろしをしなくてもいいと喜んでた。大雪で喜ぶのは、我々都会の者だけかも知れない。

(02生 内田 知宏)

変集後記……もとい、編集後記なんて大それたこと書かせていただく程仕事してない気がするんだけど一許してね。編集長のみぼちゃんはじめ、委員の皆さん、お疲れ summer vacation!

(新入り01生 古川 博子)

今回(も?) 私は編集長と他の編集委員の皆様には頭があがりません。誠に申し訳ありませんでした。心からおわび申し上げます。

(02生 森野 美和)

以上が今回の「飛翔」41号の編集部の面々であります。その他にも協力して頂いた方々や原稿依頼を快く引き受けて頂いた皆様、本当にありがとう!!心から感謝します。

「ボランティアじゃねえぞ」という言葉を残して去っていった63生編集委員。実際、「何でこんな事しなくちゃいけないんだ」とは編集委員、皆、誰しも思ったのではないかと。確かに「飛翔」という広報紙がなくなってもさして影響をうけるものはないだろう。しかし過去幾度もの、そして今回も又存続の危機を乗り越えてここまで来たのである。だから…土井たか子さん風に「やるっ気ゃない」のである。(ちょっと古いかな)

毎週水曜PM3:00, 社会文化研究室でこれからは42号に向けて猛然と突き進むのみである。総科の事、大学生活の事をもうちょっとよく考えてみようと思ってる人、書くことが無条件に大好きな人、いろんな人と触れ合いたいと思ってる人、いつでも待ってるからね。

平成4年度総合科学部学期区分の臨時変更について

本学部は平成4年度末に東広島市へ移転する予定です。これに伴い平成4年度（専門教育・一般教育）の学期区分を下記のとおり臨時に変更いたします。

記

	期 間	区 分
前 期	4月1日～4月8日	春季休業
	4月9日～7月17日	授業
	7月18日～8月31日	夏季休業
	9月1日～9月17日	授業
	9月18日～9月30日	秋季休業
後 期	10月1日～12月26日	授業
	12月27日～1月7日	冬季休業
	1月8日～2月3日	授業
	2月4日～3月31日	学年末休業

広報委員

堀越孝雄 古東哲明 松岡俊二
 上原麻子 小野光代 水上孝一
 播磨裕 佐藤博明 上領達之

事務官

木上尊子 中道一博

学生編集委員

岡村美穂 内田知宏 北村綾乃
 小島美紀 佐々木恒 南場千里
 森野美和 蟹由昌美 井戸田典子
 大澤一高 酒井良葉 田島誠子
 中島英紀 古田智子 山元恵子
 古川博子 大村尚

広島大学総合科学部広報委員会

住所：広島市中区東千田町1-1-89

電話 (082) 241-1221 内線2247